

高志の国
文学館

KOSHINOKUNI
Museum of Literature

高志の国文学館 紀要

第9号

令和5年度高志の国文学館 紀要 第9号

目次

I 〔企画展概要〕

- | | | |
|--|-------|----|
| (1) 企画展「絵本作家降矢なな原画展」 | 亀島麻衣子 | 4 |
| (2) 企画展「富山新聞創刊100年記念 ドナルド・キーン 世界から見た日本文学展」 | 大川原竜一 | 10 |
| (3) 企画展「没後50年 コスモポリタン 翁久允 OKINA Kyun 脱日本人！展」 | 小林加代子 | 16 |
| (4) 企画展「堀辰雄生誕120年展 “風立ちぬ” 堀辰雄と軽井沢の文学者たち」 | 綿引 香織 | 22 |

I 〔企画展概要〕

(1) 企画展「絵本作家降矢なな原画展」

亀島麻衣子

(2) 企画展「富山新聞創刊100年記念

ドナルド・キーン 世界から見た日本文学展」

大川原竜一

(3) 企画展「没後50年 コスモポリタン翁久允 OKINA Kyuin 脱日本人！展」

小林加代子

(4) 企画展「堀辰雄生誕120年展

“風立ちぬ”堀辰雄と軽井沢の文学者たち」

綿引 香織

(1) 企画展

「絵本作家降矢なな原画展」

亀島 麻衣子

二〇二三年夏。ロシアによるウクライナ侵攻は長期化し、一年以上が過ぎても収束の兆しは見えなかった。ウクライナの子どもたちは、子どもらしく過ごす「子ども時間」を奪われ、恐怖と隣り合わせの日々を送っていることがニュースからは想像された。一方、日本では新型コロナウイルス感染症の5類移行後初の夏休み。本館では、ウクライナの隣国であるスロバキア在住の絵本作家、降矢ななの原画展「絵本作家降矢なな原画展」を開催した。

降矢ななは、一九六一年（昭和三十六年）、東京生まれ。巧みな絵本の表現で最も注目を集める絵本作家のひとりである。『めっきらもつきらどおんどん』で絵本作家としてデビューした後、一九九二年にスロバキア共和国のブラチスラバ美術大学に留学。画家で絵本作家のドウシャン・カーライに師事し、石版画とイラストレーションを学んだ。現在はブラチスラバのワインの産地、ペジノクで画家の夫、娘と共に暮らしながら絵本を描いている。テキストを読み込み、イメージを膨らませて描いた絵本は、ユーモアのある登場人物の造型、大胆なデフォルメと構図、色彩の美しさ、細部の絵の遊びなどテーマに沿ったあらゆる表現方法を駆使し、子どもたちが絵本の世界で遊び夢中になる工夫を凝らし、高い評価を得ている。

本展では降矢の代表作を中心に、物語に新しい息吹を吹き込む絵本表現の魅力にあふれた多彩な作品を四つの章に分けて紹介した。

【第1章 はじまりの絵本 絵本作家降矢なな誕生】では、デビュー作である『めっきらもつきらどおんどん』（作：長谷川摂子・画：ふりやなな、福音館書店、一九八五）、二作目となる『ちよろりんのすてきなセーター』（作：降矢なな、福音館書店、一九八六）、三作目となる『きよだいなきよだいな』（作：長谷川摂子・絵：降矢なな、福音館書店、一九八八）を取りあ

げた。

『めっきらもつきらどおんどん』は、長谷川摂子の書いたテキストをもとに不思議なおぼけの世界を描いた作品である。作家とのやり取りを通して生き生きとしたキャラクターを作り、構図や展開、ちぎり絵の技法を取り入れるなどの工夫を凝らしている。また、おぼけの世界で登場人物たちが元気いっぱい遊ぶ場面を勢いよく描くために、降矢はおぼけの世界の場面は原寸ではなく一・五倍の大きさを描いている。絵本では縮小して印刷しているため、降矢が意図した勢いや迫力は、原画でこそ味わうことができる。なお、三人のおぼけは浮世絵や絵巻などの古い日本画を参考に作り出している。白狐の顔をしたおぼけを長谷川の助言で描き直したところ、長谷川がおもしろがっておぼけの名前を「ぎっこことんこ」から「もんもんびやっこ」に変更したという。絵本とは作家と一緒に作り上げていくものだとこのことを学んだと、さまざまなインタビュで降矢は当時を振り返っている。この絵本は一九九〇年に単行本化されて以来、二〇二二年には一〇〇刷を超え、時代を超えて愛される絵本となった。

『きよだいなきよだいな』は、長谷川と再び組んだ、降矢の絵本三作目である。カラージュの技法を使い、立体感を感じさせる迫力のある絵に仕上がっており、原画で見える価値を感じさせる。降矢の絵に頻りに登場するキツネがすべての場面に潜み、キツネを発見する「遊び」となっている。また、キツネの目線になることで絵本の世界に引き込まれ、「きよだいなきよだいな」スケール感を体感できる。読後に「もしも、きよだいな〇〇があったら……」と想像力がかき立てられる作品であり、富山大学教育学部附属幼稚園の園児たちに「ぼくたちわたしたちのきよだいなきよだいな」と題して制作を依頼した巨大絵画をエントランスに展示した。

【第2章 旅だちドウシャン・カーライとの出会い】では、絵本デビュー以来自分の絵を模索していた降矢が、東欧を代表する絵本画家ドウシャン・カーライの絵本に衝撃を受け、彼が教鞭をとる美術大学があるチェコスロバキア（現・スロバキア共和国）に留学する決意をした一九九二年の作品『たびにでよう』（作：降矢なな、童心社、一九九二）から、留学中に手がけた『おっきよちゃんとかっぱ』（文：長谷川摂子・絵：降矢なな、福音館書店、

一九九四)のほか、『ナミチカのきのこがり』(作・降矢なな、童心社、二〇一〇)、『チェコのむかしばなし ヴォドニークの水の館』(文・まきあつこ・絵・降矢なな、B.L出版、二〇二二)を取りあげた。

『たびにでよう』は、リュックひとつで旅に出る男の子を主人公にした絵本で、留学に旅立つ降矢の姿と重なる。男の子と犬の行程が左から右へ流れるように描かれている構図には東欧のアニメーションの、図柄や表現にはドウシャン・カーライの影響が感じられる。原画は四色分版で手描きされており、それぞれの色の原画を展示した。また、今では珍しくなったこの印刷手法については映像で解説した。

『おっきよちゃんとかっぱ』は、川の底にあるかっぱの世界が舞台となっており、場面に合わせて描かれた水の表現には「色彩の魔術師」と呼ばれたドウシャン・カーライの影響が感じられる。留学中に自分の絵や自分自身に向き合い、自分が表現したいのは「物語のある絵」だということ、絵本は自分の天職だと素直に思えるようになったという転機に重なる作品である。

『ナミチカのきのこがり』や『チェコのむかしばなし ヴォドニークの水の館』は、後年、降矢がスロバキアに根を下ろしてから作品で、原画から東欧の空気や土の匂いまで感じることができるようである。

【第3章 絵本ができるまで】では、『やまんば山のモッコたち』(作・富安陽子・画・降矢奈々、福音館書店、一九八六)、「やまんばのむすめ まゆのおはなし」シリーズから『まゆとおに』(文・富安陽子・絵・降矢なな、福音館書店、一九九九)と『まゆとブカブカブー』(文・富安陽子・絵・降矢なな、福音館書店、二〇〇二)、最新刊となる『はるのひるねうた』(文・松野正子・絵・降矢なな、福音館書店、二〇二三)を取りあげ、降矢の絵本制作の裏側について紹介した。絵本は一人の作家が絵と文の両方を書く場合もあるが、それぞれを違う作家が担当する場合も少なくなく、文を書く作家と絵を描く作家、担当編集者が力を合わせて一つの絵本を作り上げている。かけがえのない一冊を作り上げるために重ねられた工夫や試行錯誤が伝わる原画やラフ画を展示した。

『まゆとブカブカブー やまんばのむすめ まゆのおはなし』は、シリーズで唯一、絵が横型で描かれており、ページをめくるごとに森の奥へ奥へと

誘われる。ここでは全ページの原画に加え、担当編集者の助言で描き直した原画も展示した。主人公の「まゆ」が正体不明のブカブカブーと対峙する場面以降は最初に、返事をしないブカブカブーに顔を真っ赤に目をつり上げ大きく口を開けて怒っているまゆを描いたが、後に、しっかりと意志を持った強い目に唇を強くむすんで立つまゆを描いた絵に差し替え、自然と共に生きる少女の心の強さを強調した。これぞ「まゆ」という表現をするために作品を深く読み込み、テキストに生命を与えている。ほかに二点の差し替え原画を展示し、登場人物の感情や性格なども含めた「物語を伝える」ための工夫を紹介した。

『はるのひるねうた』は、児童文学作家・翻訳家の松野正子が書いた春の日に昼寝をする場面に合わせた数え歌風のテキストがもとになっている。降矢は作品を読み込み、アイデアラフとして秋田犬やねずみ、さまざまな動物たちを描いた。登場人物だけでなく場面展開も考え、何パターンものアイデアラフを描くなかで、「むつつ むりやり おこしても」のテキストから「誰かが誰かを起こそうとしている物語」に気づき、何度も描き直した末、動物たちが大きなクマを起こす物語を描きあげた。本展で展示したラフスケッチの一部を見ても、テキストは同じでも出てくる動物や場面展開が違ったり全く異なる絵本ができあがることに気づく。また、降矢はラフ画も手描きにこだわっている。本展で展示した多くの手描きのラフ画を前に降矢は、「AIが画像を自動生成できる時代にあっても、絵本の絵は人にしか描けないと信じている」という思いを聞かせてくれた。

【第4章 広がる絵本世界】では、降矢ななの個性が光る絵本のなかから、「おれたち、ともだち!」シリーズの『ともだちや』(作・内田麟太郎・絵・降矢なな、偕成社、一九九八)と『ともだちごっこ』(作・内田麟太郎・絵・降矢なな、偕成社、二〇一〇)、『どうぶつABCえほん』(作者・安江リエ・画家・降矢なな、のら書店、二〇一九)、『いそっぷのおはなし』(再話・木坂涼・絵・降矢なな、グランまま社、二〇〇九)を取りあげた。

『ともだちや』は、ブラチスラバ美術大学を卒業し一時帰国をしていた間に依頼を受けて制作した作品で、初めて内田麟太郎と組んだ作品である。内田のテキストはト書きが入ることもあるが、基本的には細かい指定はなく画

家に任せられているという(絵本作家インタビューvol.154「絵本作家 降矢ななさん【後編】」くもん運営サイト…ミイテ)。『ともだちや』の動物たちが服を着ているのかどうかも任せられた降矢は、テキストを読み込み、キツネの思いに寄り添い、キツネの頭にヘルメットとゴーグル、餅花飾りと「ともだちや」の幟をつけ、両手に提灯、腰には浮き輪もつけるという奇抜なファッションで表紙に登場させた。本来いい子でごくシャイなキツネが、友達欲しさの苦肉の策として「ともだちや」を始め、昼夜を問わず陸海空を問わず対応できるよう万全の態勢で挑んだ結果のファッションだという話は前出のインタビューや六月二十四日に当館で開催したトーク会でも語られている。描き方によっては湿っぽくなりそうな物語を大胆なキャラクターのデザインやコミカルな表現で描き、その後の『ともだちごっこ』を含め「おれたち、ともだち！」シリーズは全十四冊の人気シリーズとなった。

『どうぶつABCえほん』や『いそっぷのおはなし』も、テキストからイメージをふくらませ、降矢らしい大胆な構図や美しい色彩、ユーモアある表現を楽しむことができる。加えて、ブラチスラバ美術大学留学中に学んだスクラッチ画法で白黒ページを取り入れるなどの実験的な試みもみられる。

作家としてデビューしてから四〇年近く、降矢はほぼ毎年新作を発表している。多くの作家や編集者と組み、一作ずつ画風や手法を変え、多彩な絵本表現を試み、今後も降矢の絵本世界は広がっていくことだろう。

本展で降矢ななの絵本世界を楽しむための試みとして、エントランスにフォトスポットを設置し、企画展示室内の写真撮影もすべて可能とした。また、「VRで楽しもう!降矢なな原画展」をホームページで公開した。360度カメラで撮影した映像で、館外でも本展の雰囲気味わうことができる。室井滋館長のメッセージ動画や降矢の作品解説動画などを合わせ、VR視聴のみの特典も付け加えた。

入場者用の特典として、「おたからまんちんのおたからこうかん」も実施した。『めつきらもつきらとおんどん』に登場するおぼけの一人「おたからまんちん」が主人公と「おたからこうかん」をする場面になぞらえ、おたからまんちんの絵柄のスタンプを押したチラシを見せて七種類の缶バッジのうち一つをくじ引きでもらうという方法で、子どもだけでなく大人にも楽しんで

いただけたようだ。チラシは通常の企画展より多く印刷し、県内すべての幼稚園、保育所、小学校および小学部に配布した。

エントランスでは、室井滋館長の朗読で降矢の絵本を楽しむ映像「絵本の朗読 降矢なな×室井滋」を上映した。朗読音源はFMとやまの番組「室井滋のしげちゃん☆おはなしラジオ」で放送したものを使用し、放送翌日から順次、「ちょろりん」とつけー(作:降矢なな、福音館書店、一九九九)、「ナミチカのきのこがり」(作:降矢なな、童心社、二〇一〇)、『やもじろうとはりきち』(作:絵:降矢なな、佼成出版社、二〇一七)の三作品を上映した。

関連イベントとして、開会日である六月二十四日に開催した「降矢ななトーク&サイン会」のほか、八月十三日には「おはなし会&絵本フォーラム《絵本の魅力》」、七月二十三日、二十九日、三十日、八月二十七日にそれぞれ赤ちゃん、幼児、小学生、大人を対象に富山県の絵本専門士がプロデュースした「夏のおはなし会」を開催した。また、降矢を講師に開催したワークショップ「森の学校」では、小学生たちが「つながるつながる」をテーマに一冊の絵本を共同制作した。降矢ななの絵本をきっかけとして「絵本の魅力」に触れていたことを企図し、親子連れのみならず多くの絵本ファンの方々に足を運んでいただくことができた。

降矢は、一〇年、二〇年…一〇〇年先の子どもたちの未来を守っていきたいと思い、そのために子どもが子ども時間をたっぷり楽しめる絵本を作っていきたいと福音館書店のインタビューで語っている(特別インタビュー【後編】「降矢ななさん(絵本作家)」福音館書店公式ウェブマガジン…ふくふく本棚)。それはまた、戦争やコロナ禍に生きる子どもたちに希望を伝えたいという思いでもある。本展が、子どもたち、そしてかつて子どもだった大人たちが絵本を通して「子ども時間」をたっぷり楽しむ機会となっていれば幸いである。

□主な展示物

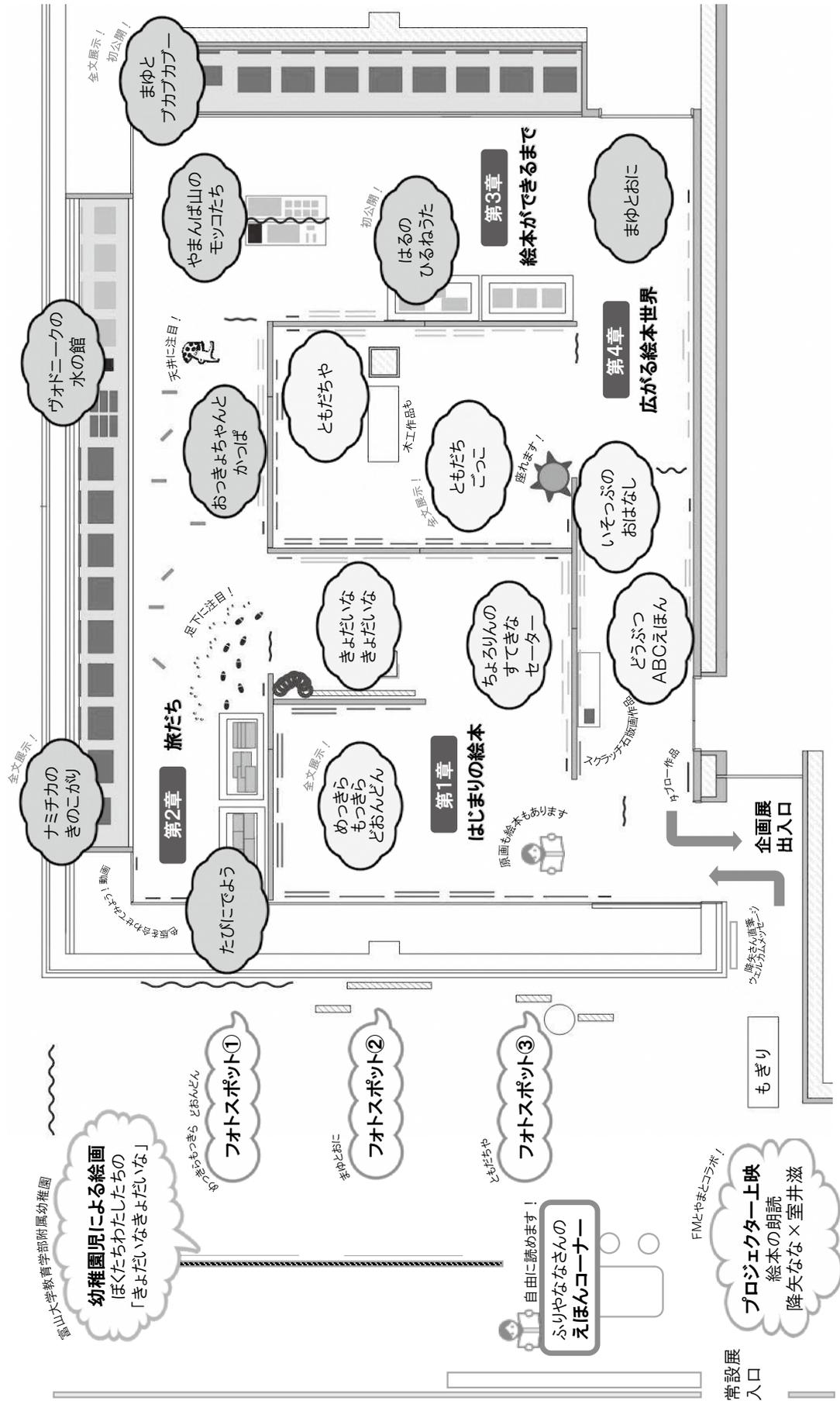
種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
エンタランス(ロビー)				
絵	ばくちわたしたちの 「きよだいなきよだいな」2点	富山大学教育学部 附属幼稚園	令和5年(2023)	富山大学教育学部 附属幼稚園
映像	絵本の朗読 降矢なな×室井滋	高志の国文学館	令和5年(2023)	高志の国文学館
図書	めっくらもっくらどおんどん (福音館書店)	長谷川摂子、 ふりやなな	平成2年(1990)	高志の国文学館
図書	ちよろりんのすてきなセーター (福音館書店)	降矢なな	平成5年(1993)	高志の国文学館
図書	ちよろりんととつけい (福音館書店)	降矢なな	平成11年(1999)	高志の国文学館
図書	きよだいなきよだいな (福音館書店)	長谷川摂子、 降矢なな	平成6年(1994)	高志の国文学館
図書	おっきよちゃんとかっぱ (福音館書店)	長谷川摂子、 降矢奈々	平成9年(1997)	高志の国文学館
図書	やまれば山のモッコたち 改訂版 (福音館書店)	富安陽子、 降矢奈々	平成12年(2000)	高志の国文学館
図書	まゆとおに(福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成16年(2004)	高志の国文学館
図書	まゆとプカプカプー (福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成13年(2001)	MIMoseele
図書	まゆとりゅう(福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成20年(2008)	高志の国文学館
図書	まゆとろりんこ(福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成25年(2013)	高志の国文学館
図書	まゆとかっぱ(福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成30年(2018)	高志の国文学館
図書	まゆとおおきなケーキ (福音館書店)	富安陽子、 降矢なな	平成26年(2014)	高志の国文学館
図書	えんどうまめばあさんとそらま めじいさんのいそがしい毎日 (福音館書店)	松岡享子、 降矢なな	令和4年(2022)	高志の国文学館
図書	はるのひるねうた(福音館書店)	松野正子、 降矢なな	令和5年(2023)	高志の国文学館
図書	ともだちや(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成10年(1998)	高志の国文学館
図書	ともだちくるかな(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成11年(1999)	高志の国文学館

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
図書	あしたもともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成12年(2000)	高志の国文学館
図書	ごめんねともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成13年(2001)	高志の国文学館
図書	ともだちひきとりや(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成14年(2002)	高志の国文学館
図書	ありがとうともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成15年(2003)	高志の国文学館
図書	あいつもともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成16年(2004)	高志の国文学館
図書	きになるとともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成20年(2008)	高志の国文学館
図書	ともだちごっこ(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成22年(2010)	高志の国文学館
図書	よろしくともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成24年(2012)	高志の国文学館
図書	いつだってともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成28年(2016)	高志の国文学館
図書	さよならともだち(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成30年(2018)	高志の国文学館
図書	ともだちおまじない(借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	平成18年(2006)	高志の国文学館
図書	ともだちいっしゅうかん (借成社)	内田麟太郎、 降矢なな	令和3年(2021)	高志の国文学館
図書	チェコのむかしばなし.. ヴォドニークの水の館 (BL出版)	まきあつこ、 降矢なな	令和3年(2021)	高志の国文学館
図書	どうぶつABCえほん (のら書店)	安江リエ、 降矢なな	平成31年(2019)	高志の国文学館
図書	いそっぷのおはなし (クランママ社)	木坂涼、 降矢なな	平成21年(2009)	高志の国文学館
図書	黄いろのトマト(ミキハウス)	宮沢賢治、 降矢なな	平成25年(2013)	高志の国文学館
図書	赤いくつ(女子パウロ会)	アンデルセン、 岩崎京子、 降矢なな	平成16年(2004)	MIMoseele
図書	ナミチカのきのこがり(童心社)	降矢なな	平成22年(2010)	高志の国文学館

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
図書	やまじろうとはりきち (佼成出版社)	降矢なな	平成29年(2017)	高志の国文学館
パネル	降矢ななの本棚 絵本と児童書	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
パネル	「めつきらもつきらじおんどん」 p22～23	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
パネル	「まゆとおに」 p2～3	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
パネル十立体	「しもだちや」 p20～21	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
企画展「至入口」				
パネル	降矢なな略年譜	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
書画	降矢なな直筆色紙(本館宛て)	降矢なな	令和5年(2023)	高志の国文学館
書画	降矢なな直筆色紙(挨拶)	降矢なな	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
第1章「はじまりの絵本 絵本作家 降矢なな誕生」				
原画	「めつきらもつきらじおんどん」 19点	降矢なな	昭和60年(1985)	個人
原画	「ちよろりんのすてきな セーター」7点	降矢なな	昭和61年(1986)	個人
原画	「きよだいなきよだいな」8点	降矢なな	昭和63年(1988)	個人
パネル十立体	「きよだいなきよだいな」黒電話	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
第2章「旅だち ドウシャン・カールライとの出会い」				
原画	「たびにでよう」6点	降矢なな	平成4年(1992)	個人
映像	色版を合わせてみよう!	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
原画	「おつきまちゃんとかっぱ」8点	降矢なな	平成6年(1994)	個人
原画	「ナミチカのきのこがり」22点	降矢なな	平成22年(2010)	個人
ラフ画	「ナミチカのきのこがり」10点	降矢なな	平成22年(2010)	個人
パネル	「ナミチカのきのこがり」見返し	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
原画	「ゾドニークの水の艦」8点	降矢なな	令和3年(2021)	個人
第3章「絵本がでるまで」				
パネル	「やまんば山のモッコたち」 改訂版見返し	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
原稿	「やまんば山のモッコたち」 改訂版表紙	降矢なな	平成12年(2000)	個人
原稿	「やまんば山のモッコたち」 題字 3点	降矢なな	昭和61年(1986)	個人
原稿	「やまんば山のモッコたち」 旧版表紙 9点	降矢なな	昭和61年(1986)	個人

種別	資料(作品)名	作者	年代	所蔵
原画	「やまんば山のモッコたち」 19点	降矢なな	昭和61年(1986)	個人
原画	「まゆとおに」 9点	降矢なな	平成11年(1999)	個人
原画	「まゆとフカフカプー」 23点	降矢なな	平成13年(2001)	個人
原画	「はるのひるねうた」 4点	降矢なな	令和5年(2023)	個人
ラフ画	「はるのひるねうた」 37点	降矢なな	令和5年(2023)	個人
第4章「広がる絵本世界」				
原画	「ともだちや」 9点	降矢なな	平成10年(1998)	個人
原画	「ともだちごっこ」 18点	降矢なな	平成22年(2010)	個人
パネル	「どぶつABCえほん」 「L」のハシゴに登るキツネ	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
原画	「どぶつABCえほん」 7点	降矢なな	平成31年(2019)	個人
原画	「いそぶのおはなし」 8点	降矢なな	平成21年(2009)	個人
立体	切り株	MIMOSEEEIE	令和5年(2023)	MIMOSEEEIE
立体	赤い長靴のワニ	降矢なな		個人
立体	恐竜積み木 2点	降矢なな		個人
原画	あるオオカミ	降矢なな	平成30年(2018)	個人
原画	あるキツネ	降矢なな	平成30年(2018)	個人
原画	PF196	降矢なな	平成7年(1995)	個人
原画	彼の帽子	降矢なな	平成8年(1996)	個人
原画	konkon II	降矢なな	平成12年(2000)	個人
原画	謹賀新年	降矢なな	平成13年(2001)	個人
原画	キツネ村・春	降矢なな	平成14年(2002)	大島絵本館
原画	キツネ村・冬	降矢なな	平成15年(2003)	大島絵本館

□ 企画展示室平面図



(2) 企画展

「富山新聞創刊100年記念 ドナルド・キーン 世界から見た日本文学展」

大川原竜一

一つの世界全体を一個の鮮明な影像で暗示するというこの方法は当然、短い詩形式に限られたもので、事実、日本の文学はそういう表現形式にかけて殊に優れている。日本の文学には世界で最も長い小説や劇があつて、その中の或るものは文学作品としても見事であるが、細部の新鮮な描写で生き生きと暗示する能力は日本の文学に特有のものである。

(『日本の文学』「吉田健一訳」より)

本展覧会は、ドナルド・キーン (Donald Lawrence Keene、一九二二年「大正11」〜二〇一九年「平成31」) の著述や翻訳を通して、日本文学を世界的な視野で俯瞰し位置づけることを目的として、特別展「生誕一〇〇年 ドナルド・キーン展―日本文学へのひとすじの道」(県立神奈川近代文学館、二〇二二年「令和4」5月28日〜7月24日) をもとに、富山県オリジナルの展示資料をくわえて再構成したものであった。日本の魅力を世界にひろめたキーンの人生をたどりながら彼の功績や素顔を紹介し、日本文学のみならず日本の伝統演劇や日本文化を見つめ直す展示とした。

エントランスには、導入展示として二箇所の上映コーナーを設置した。一つは、キーンが一九九二年(平成4)に富山県生涯学習力レッジで講演した際の「県民カレッジ夏季講座 世界の中の日本文化」の映像、もう一つは、国際交流基金企画・NHKエデュケーショナル制作の「日本文学を世界へ」ドナルド・キーンの生涯」の映像である。これらによりキーンの生涯と研究の一端を分かりやすく知ることができるようにした。

企画展示室内では、一般財団法人ドナルド・キーン記念財団の特別協力を

えて、キーンの直筆原稿や著作、作家と交わした書簡などを展観した。文学の世界にとどまらず伝統芸能を自ら体験することで日本文化の本質をとらえて、その魅力を国内外に発信した、キーンの業績を多角的に紹介した。

イントロダクションとしては、キーンの略年譜とともに、英語版をまじえたキーンの多数の自伝を展示。学者としての広範な知識をもち、日本研究を日本語と英語で著述できるキーンは、アメリカから来た日本学者として草分け的存在であり、世間の注目を浴びた。

第1章「ドナルド・キーンのルーツ」では、2回飛び級してコロンビア大学に入学、そして太平洋戦争下をへて日本文化への関心を深めていったキーンの軌跡をたどった。「高校時代の成績表」や大学2年生時のレポート『Flaubert's Symbolism』(「フローベールの象徴主義」、東京都北区立中央図書館寄託)でキーンの学生時代を紹介。米海軍の日本語学校に入学後、11か月という短期間で日本語の読み書きと会話を取得したというキーンが、はじめて書いた日本語のレポート「菊池寛「勝敗」の感想文」も公開した。また、戦争中は情報将校として従軍し、日本語文書の解読、捕虜の尋問や通訳の任務に携わったことを、「青島時代の名刺」や戦後処理時の報告書『The Gentlemen Cannibals, Manuscript』(「人食い紳士」原稿)などの貴重な資料で示した。キーンは、ハワイ、アッツ島、沖縄などを転戦するなかで、日本人兵士が死を目前にして書きのこした日記や遺書を読んで深い感銘を受け、日本人の精神性や人間性に興味をもったという。戦後は復員して、コロンビア大学大学院に復帰。ハーバード大学大学院、英国ケンブリッジ大学を経て、一九五三年(昭和28)に京都大学大学院に留学する。

第2章「碧い眼の日本学者―文学者との交遊」では、日本学者としての道を歩みだしたキーンが、日本文学の翻訳に邁進し、そして海外への発信につとめた功績を紹介した。太宰治(「斜陽」「人間失格」)、三島由紀夫(「近代能楽集」「宴のあと」)、安部公房(「友達」)の作品のほか、『Anthology of Japanese Literature』(「日本文学選集 古典篇」)などで日本文学を代表する作品を、美しい英語に翻訳し、その魅力を世界に知らせた。キーンは、長年、日本とアメリカを行き来する。日本では、谷崎潤一郎や川端康成、三島由紀夫、安部公房、司馬遼太郎など、数多くの作家たちと交流を重ねながら

皮膚感覚で日本の文学を評論・研究。アメリカでは、コロンビア大学で88歳を過ぎるまで教鞭をとり、多くの優秀な研究者を育成した。

作家たちとの交遊を物語る資料として、キーンの送別狂言会を告知した谷崎潤一郎宛て書簡や、小説「鏡子の家」執筆中に送られたキーン宛ての三島由紀夫書簡、また、安部公房から贈られたユリー・ワシリーエフ (Yuri Vasilev、ソ連の彫刻家・画家) のリトグラフなどを展示。くわえて、「鉢木会」にゲストとしてキーンが招かれた際に、大岡昇平や三島由紀夫、吉田健一、吉川逸治、神西清、福田恆存とともにキーンがしたためた連歌帖を、県立神奈川近代文学館より特別に借用し、出展した(前期・9月24日〜10月23日のみ)。またここでは、キーン自身が作家たちとの交遊エピソードを語った「ドナルド・キーン、作家を語る」のインタビュー映像をドナルド・キーン・センター柏崎より提供いただき上映した。

さらに本章では、能、文楽、歌舞伎など伝統演劇を世界へひろめた意義を伝える場を設けた。キーンは机上の研究にとどまらず、アメリカとメキシコの大学における能公演の実現に積極的に関わる。古典芸能や舞台芸術に深く親しみ、近松門左衛門の浄瑠璃 (『Major Plays of Chikamatsu』) や「仮名手本忠臣蔵」(『Chushingura』) の英訳書、能や文楽の英語概説書 (『No! Buraku』) などを著して、その魅力を海外に伝えたことをひも解いた。

第3章「時を旅する―世界から見た日本文学」は、キーンの学者としてのライフワークとなった、個人単独による初の日本文学史通史の『日本文学史』と『日本文学の歴史』、平安時代から明治時代までの日記をよみとぎ、日本人の精神性の変遷を大局的な視点で描いた『百代の过客』などの業績を展示するコーナーとした。キーンは、『The Narrow Road to Oku』(『おくのほそ道』) や『The Tale of the Bamboo Cutter』(『竹取物語』) とつった古典の翻訳のみならず、『Japanese Literature』(『日本の文学』) や『The Pleasures of Japanese Literature』(『古典の愉しみ』) などといったさまざまな解説書を著し、英語圏の読者を日本文学に近づけた。また、日本各地を歩き、その経験をまとめ、『Living Japan』(『Landscapes and Portraits』)、日本そのものの魅力を海外に伝えている。

第4章「日本人の心性を探る」では、『日本文学の歴史』完成のち、文

学史に匹敵するテーマにとりくんだ、伝記作品『明治天皇』『足利義政』『石川啄木』を紹介した。いずれの人物にも共通するのは、歴史の変革期に生き、時代の特質を築いた点である。これら評伝の展示を通して、日本および日本人の精神、日本文化の魅力についても深く掘りさげることができた。

最後の第5章「エピソード 素顔のドナルド・キーン」は、「創作の現場」として「第2書齋」を再現するとともに、「上原誠己との養子縁組記念写真」や「教え子たちによる91歳の誕生会で」、「料理をするキーン」などの写真を数多く掲示し、キーンの人となりを知る場とした。「第2書齋」は、執筆のための書齋とは別に、キーンがちよっとした合間に手紙を書いたりしていた空間であった。ここでは、キーンが着用したスーツや靴、コロンビア大学名誉博士号授与時のガウンのほか、商店街に買物に出かける際に欠かさず持ち歩いた愛用の買い物かごを展示した。さらに、キーンのお気に入り、自宅玄関に飾られていた富山県高岡市出身の画家・古川通泰の油彩画「里の祭り」もお披露目できた。

今回の展示では、パネルやキャプションにはすべて英訳を併記するという当館で初めての試みをおこなった。あわせて、日本および日本の文学や文化についてのキーンの評言や言葉をパネルで掲示し、彼の思いやメッセージが来館者に伝わるように工夫した。日本をこよなく愛し、日本人より日本を知る人と呼ばれたキーンのメッセージをつぎに引用する。

今も未来も守るべきものはあります。それは日本語です。一〇〇年先には日本語以外の言葉が国際語になっているかもしれない。しかし、日本語こそが日本人の宝物と信じて疑いません。ぜひ守ってください。これこそは私の一番の願いです。お願いします。

(私が日本人になった理由 日本語に魅せられて)より)

日本の文学や文化の良さを忘れかけている日本人に、日本と日本文化の素晴らしさについて語り尽くし、また、独創的かつ本質的な視点から日本の文学や文化を論じ、日本人に日本の魅力を再認識させたキーンの功績は大きい。

本展は、ドナルド・キーンの視点でみた日本文学や日本文化の魅力を知るとともに、日本文学の素晴らしさや文化の豊かさを再発見できた有意義なものとなった。

□主な展示物

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
エンタテインメント(ロビー)				
映像・	「県民カレッジ夏季講座 ドナルド・キーン」 「世界の中の日本文化」	富山県民生涯学習カレッジ	平成4年(1992)7月20日	富山県民生涯学習カレッジ
映像・	「日本文学を世界へ」ドナルド・キーン「の生涯」	NHKエデュケーショナル		国際交流基金
企画展示室内 導入				
パネル	略年譜	高志の国文学館	令和5年(2023)9月24日	高志の国文学館
書籍	Donald Keene 『On Familiar Terms』	Kodansha International	平成6年(1994)	個人
書籍	Donald Keene 『Chronicles of My Life』	Columbia Univ. Press	平成20年(2008)	個人
パネル	写真「『万葉集全20巻朗唱の会』に参加」		平成8年(1996)10月5日	個人
企画展示室内 第1章「ドナルド・キーンのリーツ」				
一枚もの	高校時代の成績表			個人
冊子	The Log (Madison High school の卒業アルバム)	Madison High school	昭和13年(1938)6月	個人
パネル	写真「リー・スーリンと」		昭和14年(1939)夏頃	個人
原稿	*Rubert's Symbolism, 「ドナルド・キーン」の参訳	Donald Keene	昭和14年(1939)12月	東京都北区立中央図書館 寄託
書籍	『The Tale of Genji』 (Arthur Waley trans.)	Houghton Mifflin Co.	昭和10年(1935)	個人
書籍	北大路魯山人「常用漢字三体系字帖」(5版)	扶原屋文館	昭和15年(1940)3月	個人
パネル	転戦地図	県立神奈川近代文学館	令和4年(2022)5月28日	県立神奈川近代文学館
原稿	「菊池寛『勝敗』の感想文」	ドナルド・キーン	昭和19年(1944)	個人
愛用品	青島時代の名刺	ドナルド・キーン		個人
原稿	*『The Gentlemen Cannibals』 (入喰ご神十)	Donald Keene	昭和21年(1946)	個人
書籍	Oris Cary, Donald Keene [et al.] 『War-Wasted Asia: Letters, 1945-46』	Kodansha International	昭和50年(1975)	個人
書籍	Tsunoda Ryusaku, Donald Keene, Theodore de Bary 『Sources of Japanese Tradition』 (7th edition)	Columbia Univ. Press	昭和46年(1971)	個人

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書籍	Donald Keene 『The Japanese Discovery of Europe』	Routledge and Kegan Paul	昭和27年(1952)	東京都北区立中央図書館
書籍	ドナルド・キーン「日本人の西洋発見」(藤田豊・大沼雅彦訳)	錦正社	昭和32年(1957)2月	個人
パネル	写真「カンブリッジ大学」		昭和23年(1948)	個人
書籍	Donald Keene 『The Battles of Coxingal』	Taylor's Foreign Press	昭和26年(1951)	個人
書籍	Donald Keene 『Japanese Literature』	Charles E. Tuttle	昭和52年(1977)	個人
企画展示室内 第2章「若い眼の日本学者―文学者との交遊」				
パネル	「ドナルド・キーン 日本文学研究の樹」	ドナルド・キーン・センター 柏崎		ドナルド・キーン・センター 柏崎
映像・	DKKK映像ライブラリー「ドナルド・キーン、作家を語る」	ドナルド・キーン・センター 柏崎		ドナルド・キーン・センター 柏崎
パネル	新聞記事「若い眼の太郎冠者」	毎日新聞社	昭和29年(1954)2月18日	毎日新聞社
雑誌	ドナルド・キーン「紅毛文芸時評 伊藤整著「文学入門」を読んで」(中央公論70巻1号)	中央公論社	昭和30年(1955)1月	県立神奈川近代文学館
書籍	Donald Keene ed. 『Anthology of Japanese Literature』	Grove Press	昭和30年(1955)	個人
書画	書画帖	谷崎潤一郎、松子、茂山七三、千五郎ほか	昭和30年(1955)	個人
パネル	写真「湯河原湘碧山房に」		昭和39年(1964)9月6日	中央公論新社
書籍	ドナルド・キーン「若い眼の太郎冠者」	中央公論社	昭和32年(1957)10月	個人
パネル	写真「ドナルド・キーン氏送別狂言会」で狂言「千鳥」の太郎冠者を演じる」	渡部雄吉撮影	昭和31年(1956)9月13日	個人
印刷物	「ドナルド・キーン氏送別狂言会」プログラム		昭和31年(1956)9月13日	県立神奈川近代文学館
書簡	キーン 谷崎潤一郎宛て書簡	ドナルド・キーン	昭和31年(1956)9月9日	個人
パネル	写真「鉢木会」		昭和30年(1955)4月6日	県立神奈川近代文学館
書画	「鉢木会 八」連歌帖	ドナルド・キーン、大岡昇平、三島由紀夫、吉田健一、吉川逸治、神西清、福田恒存	昭和30年(1955)	県立神奈川近代文学館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書籍	マナド・キーン「日本の文学」(吉田健一訳)	筑摩書房	昭和38年(1963)2月	個人
パネル	写真「川端康成」		昭和46年(1971)9月14日	朝日新聞社'amanaimage
書籍	Dazai Osamu『The Setting Sun』(Donald Keene trans.)	New Directions	昭和31年(1956)	個人
書籍	Donald Keene ed.『Modern Japanese Literature』	Grove Press	昭和31年(1956)	個人
書籍	川端康成から贈られた「鐵齋」	筑摩書房	昭和32年(1957)2月	個人
書籍	Kawabata Yasunari『House of the Sleeping Beauties and Other Stories』(Edward Seidensticker trans.)	kodansha International	昭和44年(1969)	東京都北区立中央図書館
書籍	三島由紀夫「近代能楽集」	新潮社	昭和31年(1956)4月	個人
書籍	Mishima Yukio『Five Modern No Plays』(Donald Keene trans.)	Alfred A. Knopf Press	昭和32年(1957)	高志の国文学館
印刷物	「班女」上演案内(マナド・キーン英訳)	中央公論社	昭和32年(1957)4月12日	個人
書簡	三島由紀夫 キーン宛て書簡	三島由紀夫	昭和33年(1958)8月2日	個人
パネル	写真「三島由紀夫」		昭和39年(1964)6月18日	中央公論新社
写真	三島由紀夫主演 映画「からの風野郎」プロモーション		昭和35年(1960)3月封切	個人
雑誌	マナド・キーン「流ちょうな日本語と洞張力」(『新刊展覧』89巻5号)	日本出版販売	昭和39年(1964)3月	県立神奈川近代文学館
書籍	Mishima Yukio『After the Banquet』(Donald Keene trans.)	Alfred A. Knopf Press	昭和38年(1963)	個人
書籍	Mishima Yukio『Death in Midsummer, and other stories』(Donald Keene trans.)	New Directions	昭和41年(1966)	個人
雑誌	マナド・キーン「国際文学賞審議開記」(『中央公論』82巻89号)	中央公論社	昭和42年(1967)7月	県立神奈川近代文学館
書籍	Mishima Yukio『Madame de Sade』(Donald Keene trans.)	Charles E. Tuttle	昭和46年(1971)	個人
原稿	「マ田の一夜」	マナド・キーン	昭和48年(1973)	個人
パネル	写真「安部公房、武満徹」			個人
書籍	Abe Kōbō『Friends』(Donald Keene trans.)	Grove Press	昭和44年(1969)	個人
書画	安部公房から贈られたリトグラフ	Yuri Vasiliev		個人
書籍	Abe Kōbō『The Man Who Turned Into a Stick』(Donald Keene trans.)	University of Tokyo Press	昭和50年(1975)	個人
書籍	『Three Plays by Kōbō Abe』(Donald Keene trans.)	Columbia Univ. Press	平成5年(1993)	個人

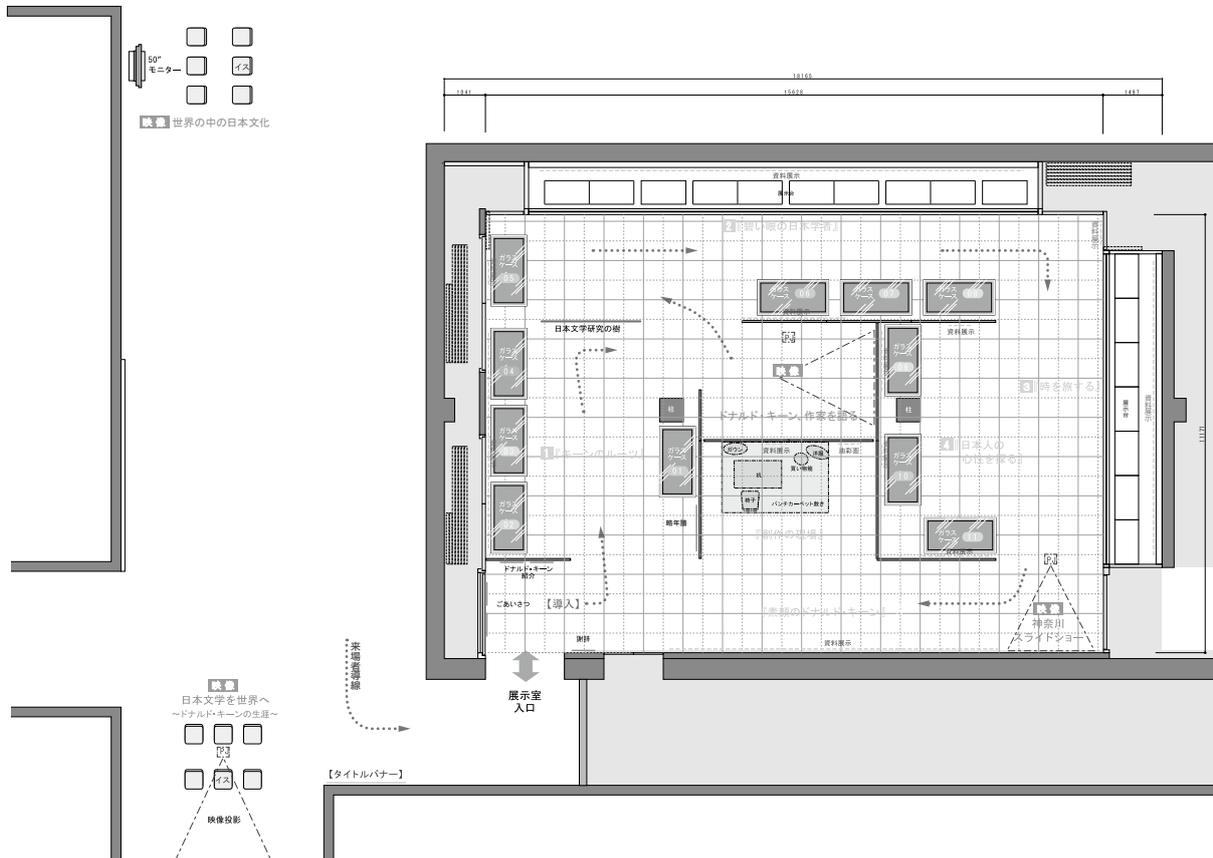
種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
原稿	「安部公房の儀式嫌い」	マナド・キーン	平成4年(1992)	個人
草稿	Abe Kōbō『The Ghost is Here』(Donald Keene trans.)	Donald Keene		個人
草稿	Abe Kōbō『Green Stockings』(Donald Keene trans.)	Donald Keene		個人
パネル	写真「ロンドン大学退官祝いの会」		平成4年(1992)3月2日	個人
原稿	「司馬遼太郎についての講演原稿」	マナド・キーン		個人
書画	「マナド・キーンさんを励ます会」巻名帖	野村万作、司馬遼太郎、ほか	平成4年(1992)6月16日	個人
書籍	Donald Keene『No』	kodansha International	昭和41年(1966)	個人
雑誌	マナド・キーン「米国大学巡回能楽団結成のついで」(『井田』15巻5号) 旧蔵の譯本5冊「音紙洗小町」「井筒」「葵上」「雷」「二人静」		昭和31年(1966)5月	個人
書籍	『Major Plays of Chikamatsu』(Donald Keene trans.)	Columbia Univ. Press	昭和36年(1961)	個人
書籍	『Chūshingural』(Donald Keene trans.)	Columbia Univ. Press	昭和46年(1971)	個人
書籍	Donald Keene『Bunraku』	kodansha International	昭和40年(1965)	個人
書籍	マナド・キーン「文楽」(吉田健一訳)『芸苑』184号	講談社	昭和41年(1966)6月	個人
雑誌	マナド・キーン「世界の狂」(『土方芸苑』184号)		平成24年(2012)6月	個人
写真	舞台写真「曾根崎心中」(キーン、坂田藤十郎サイン入り)		昭和28年(1953)	個人
書簡	キーン、谷崎潤一郎宛て書簡	マナド・キーン	昭和35年(1960)2月21日	個人
冊子	「歌舞伎座新開場」	歌舞伎座	平成25年(2013)6月	個人
企画展示室内 第3章「時を旅する―世界から見た日本文学」				
書画	「日本文学散歩 一休」	井澤元一		個人
雑誌	マナド・キーン「マナド・キーンの日本文学散歩①」(『週刊朝日』79巻2号)	朝日新聞社	昭和49年(1974)1月	県立神奈川近代文学館
書籍	Donald Keene『Some Japanese Portraits』	kodansha International	昭和53年(1978)	個人
原稿	「福島しのぶ紀行」	マナド・キーン	昭和53年(1978)	個人
パネル	写真「ロンドン大学研究室」			個人

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書籍	Donald Keene [World Within Walls]	Holt, Rinehart and Winston	昭和51年(1976)	東京都北区立中央図書館
書籍	Donald Keene [Dawn to the West] vol. 1・vol. 2	Holt, Rinehart and Winston	昭和59年(1984)	個人
書籍	Donald Keene [Seeds in the Heart]	Henry Holt and Company	平成5年(1993)	個人
書籍	ドナルド・キーン「日本文学史 近世篇 上・下(徳岡孝夫訳)」	中央公論社	昭和51年(1976) 12月、昭和52年(1977) 7月	高志の国文学館
書籍	ドナルド・キーン「日本文学史 近代・現代篇 1〜8(徳岡孝夫・角地幸男・新井潤美訳)」	中央公論社	昭和59年(1984) 2月、平成4年(1992) 12月	県立神奈川近代文学館
書籍	ドナルド・キーン「日本文学の歴史 1〜18(土屋政雄・徳岡孝夫・角地幸男・新井潤美訳)」	中央公論社	平成6年(1994) 5月、平成9年(1997) 3月	高志の国文学館
パネル	「百代の過客」年表／「続 百代の過客」年表	県立神奈川近代文学館	令和4年(2022) 5月28日	県立神奈川近代文学館
草稿	「日記の定義」	ドナルド・キーン		個人
書籍	ドナルド・キーン「朝日選書 百代の過客 日記にみる日本人」上・下(金関寿夫訳)	朝日新聞社	昭和59年(1984) 7月・8月	高志の国文学館
書籍	Donald Keene [Travelers of a Hundred Ages]	Henry Holt and Company	平成元年(1989)	個人
書籍	ドナルド・キーン「朝日選書 続 百代の過客 日記にみる日本人」上・下(金関寿夫訳)	朝日新聞社	昭和63年(1988) 1月・2月	高志の国文学館
書籍	Donald Keene [Modern Japanese Diaries]	Henry Holt and Company	平成7年(1995)	東京都北区立中央図書館
書籍	高田雅之「切り絵版画「おくのほそ道」	学習研究社	平成4年(1996)	個人
書籍	「高田雅之切り絵画集 おくのほそ道」	中央公論社	昭和62年(1987) 10月	個人
書画	色紙「月日は百代の過客」	ドナルド・キーン	平成3年(1991) 10月26日揮毫	高志の国文学館
立体物	芭蕉像	麦倉忠彦		個人
書籍	Donald Keene [Living Japan]	Doubleday & Company, Inc.	昭和34年(1959)	個人
書籍	ドナルド・キーン「講談社学術文庫 果てしなく美しい日本」(足立康訳)	講談社	平成14年(2002) 9月	高志の国文学館
書籍	Donald Keene [Landscapes and Portraits]	Kodansha International	昭和46年(1971)	個人
書籍	Donald Keene [The Pleasures of Japanese Literature]	Columbia Univ. Press	昭和63年(1988)	東京都北区立中央図書館
企画展示室内	第4章「日本人の心性を探る」			
パネル	写真「明治天皇の生誕地・京都御苑を取材」	西崎照明撮影	平成6年(1994)	個人

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
草稿	「明治天皇」執筆動機」	ドナルド・キーン		個人
草稿	「明治天皇」43回	ドナルド・キーン		個人
書籍	ドナルド・キーン「明治天皇 上・下(角地幸男訳)」	新潮社	平成13年(2001) 10月	高志の国文学館
書籍	ドナルド・キーン「明治天皇」古布装丁特装本	新田満夫企画	平成13年(2001)	個人
書籍	Donald Keene [Emperor of Japan]	Columbia Univ. Press	平成14年(2002)	個人
書籍	ドナルド・キーン「足利義政」(角地幸男訳)	中央公論新社	平成15年(2003) 1月	高志の国文学館
書籍	Donald Keene [Yoshimasa and the Silver Pavilion]	Columbia Univ. Press	平成15年(2003)	個人
書籍	芳賀幸四郎「瑞選書 東山文化」	塙書房	昭和37年(1962) 3月	個人
書籍	河合正治「センチュリーブックス 足利義政」	清水書院	昭和47年(1972) 6月	東京都北区立中央図書館
書籍	原勝郎「筑摩叢書 東山時代に於ける一縷神の生活」	筑摩書房	昭和60年(1985) 5月	個人
書籍	横井清「平凡社ライブラリー 東山文化」	平凡社	平成6年(1994) 11月	個人
パネル	写真「函館の啄木一族の墓前にて」	キーン誠己撮影	平成24年(2012) 7月18日	個人
書籍	ドナルド・キーン「石川啄木」(角地幸男訳)	新潮社	平成28年(2016) 2月	高志の国文学館
書籍	Donald Keene [The First Modern Japanese]	Columbia Univ. Press	平成28年(2016)	個人
原稿	「叛逆者啄木」	ドナルド・キーン	平成26年(2014)	個人
原稿	「啄木と私」	ドナルド・キーン		個人
企画展示室内	第5章「エピソード 素顔のドナルド・キーン」			
映画・動画	県立神奈川近代文学館制作スライドショー	県立神奈川近代文学館	令和4年(2022) 5月28日	県立神奈川近代文学館
パネル	写真「日本国のパスポートを取得した日に」	キーン誠己撮影	平成24年(2012) 3月	個人
パネル	写真「上原誠己との養子縁組記念写真」	風間忠雄撮影	平成24年(2012)	個人
パネル	写真「教え子たちによる9歳の誕生会で」		平成25年(2013)	個人
パネル	写真「ロンドン大学で講義中」			個人
パネル	写真「瀬戸内寂聴と」	鈴木伸幸撮影	平成25年(2013) 12月6日	個人
パネル	写真「内屋で買い物」			個人

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
パネル	写真「料理をするキーン」		平成25年(2013)10月2日	個人
パネル	写真「伊勢の「お白石持」行事で」		平成24年(2012)12月13日	個人
パネル	写真「沖縄・平和の礎で」		平成26年(2014)9月23日	個人
パネル	写真「無量寺で」	鈴木伸幸撮影	平成27年(2015)3月17日	個人
パネル	写真「連隊の娘」を観て踊る」		平成28年(2016)9月23日	個人
パネル	写真「メトロポリタン歌劇場で」			個人
パネル	写真「自宅のCDコレクションを整理」	キーン誠口撮影		個人
企画展示室内「創作の現場」				
パネル	写真「西ヶ原の書斎で」	三浦憲治撮影		ライトサム
愛用品	第2書斎の机・椅子、置き物、ペン立て、硯函など			個人
愛用品	スーツ、シャツ、靴、徽章			個人
愛用品	愛用の買い物かご			個人
愛用品	コロンビア大学名誉博士号授与時のガウン			個人
平面	油彩画「里の祭り」	古川通泰	平成3年(1991)	個人

□企画展示室平面図



(3) 企画展

「没後50年 コスモポリタン

翁久允 OKINA Kyuin 脱日本人！展」

小林 加代子

翁久允（1888～1973）は、現在の富山県立山町出身の作家・ジャーナリストである。明治40年（1907）、19歳でアメリカへ渡り、邦字新聞に小説を発表して「移民地文芸」を論じ、ワシントン会議を取材するなど新聞記者としても活躍し、約18年を過ごした。帰国して『週刊朝日』の編集に携わり、作家としても小説や随筆を発表、多くの文壇人と交遊した。昭和6年（1931）、画家の竹久夢二とともに再び渡米、昭和8年（1933）にはインドに旅して詩人・タゴールを訪ねた。両国での経験は、小説『悪の日影』、随想集『宇宙人（コスモポリタン）は語る』、『今日の印度』などに記されている。昭和11年（1936）、富山で郷土文化誌『高志人』を創刊、生涯を通じて刊行を続けた。戦後は三尊道運動を興して心の平和を呼びかけ、また、曼陀羅画帖を描いて得た基金で高志奨学財団を設立し、未来を担う若い人への支援に尽力した。

今回の企画展では、ご遺族より寄贈を受けた新収蔵資料九三一四点を中心として、自叙伝「わが一生」など『高志人』に記された言葉とともに、翁久允の業績を紹介した。また、その生涯を通じて、互いに刺激を与え合い支え合った、多くの知友たちとの交遊を伝える書簡や原稿を展示した。あわせて、翁久允の著作をもとに新作発表された室井滋と長谷川義史による絵本『キューちゃんの日記』（北日本新聞社、2023年）の原画を展示した。企画展示室前の無料スペースでは、会期前の令和5年（2023）12月9日に当館で開催した富山県立富山高等学校書道部による書道パフォーマンスで制作された作品を、会期末まで展示した。翁久允「三尊への道（自叙伝の一節）」（『翁久允全集 第九巻』）から書道部員が選んだ文章とその根本精神である

「愛」の一字を大書した作品である。あわせて、FMとやまのラジオ番組「室井滋のしげちゃん☆おはなしラジオ」で朗読された翁久允の随筆「悲恋の早百合姫を観音にする話」（『高志人』第18巻7月号）、「ふるさととゲンコツ和尚」（『高志人』第26巻8月号）の朗読音声と三尊道舎の写真画像などを組み合わせた映像を上映した。郷土に生きたコスモポリタン翁久允の真摯で愛情に満ちた自由な思想と活動を未来に伝えていくための展示を目指した。

第一章「親不孝者になる―六郎谷から富山、東京、そしてアメリカへ」では、翁久允の生誕から渡米するまでの足跡を紹介した。富山県立富山中学校時代の日記や作文集、古典などから気に入った文章を書き写した抜き書き帳などを展示した。あわせて、父・翁源指、富山中学時代に出会い生涯親交を結んだ山田昌作、東京で兄と生活をともにしながら学んだ私塾・三省学舎を経営する富山県出身の女性民権運動家の中川幸子との関わりを展示パネルで紹介した。パネルは、一人の人物につき一枚作成し、それぞれ肖像写真を掲載し、翁が記した文章や書簡の言葉を引用して翁との関わりを記した。また、紹介する人物ゆかりの書簡や関連資料を展示した。

第二章「ジャップの群の中―シアトルからカリフォルニアへ」では、在米時代の業績を紹介した。渡米後約6年間の活動拠点となったシアトル、ブレマートン時代の日記やシアトルの文士たちとの写真、大正2年（1913）に一時帰国の後、作家、編集記者として活躍したカリフォルニア時代に発表した作品や記事のスクラップ帳、原稿や草稿、当時の写真などを展示した。また、在米時代に知遇を得た、清澤洵、早川雪洲、野口米次郎との関わりをパネルで紹介し、書簡や原稿を展示した。

第三章「不思議な日本人、半外人―朝日新聞社時代」では、大正13年（1924）に帰国した後、先に帰国していた清澤洵の紹介で入社することとなった朝日新聞社時代の業績を紹介した。『アサヒグラフ』や『週刊朝日』の編集者として企画編集に携わり、多くの文壇人と交際するなかで、作家としても小説、戯曲、随筆を意欲的に発表した時期である。単著として刊行した随想集『コスモポリタンは語る』（聚英閣、1928年）、小説『道なき道』（甲子社書房、1928年）は書籍とともに原稿を展示し、両著の出版記念会等の写真を紹介した。また、昭和3年（1928）の宇奈月取材旅行に同

行し、『コスモポリタンは語る』、『道なき道』両著への書評を寄せた大泉黒石、中村武羅夫や川端康成らと発足した「十三人倶楽部」のメンバーで翁が逝去するまで交友を保った浅原六朗、富山県出身で作家の小寺菊子、日本画家の郷倉千朝との関わりをパネルで紹介し、書簡や原稿を展示した。

第四章「惚れてゐたが故に―竹久夢二とアメリカへ」では、昭和6年（1931）から翌年にかけての再渡米の経緯を辿った。竹久夢二と在米時代以来旧恩のある日米新聞社社長の安孫子久太郎をパネルで紹介し、書簡や、竹久夢二とともに渡米の際に乗船した日本郵船秩父丸、龍田丸のダイナーメニューなどを展示した。ダイナーメニューは、裏面に罫線が印刷されており、翁は、メニュー面に子どもたちへ、裏面にキヨ夫人への手紙を認めた。夢二との船旅の様子を伝える貴重な資料である。

第五章「そのままのいいのだ―インドでタゴールを訪ね、仏跡を巡る」では、帰国後、昭和7年（1932）12月に起航し、翌年1月から3月まで滞在したインド旅行の足跡を紹介した。インド旅行時の日記や渡航関係書類、タゴールから贈られた自筆の詩、仏跡巡礼の途中で偶然出会い行動をとともにしたシラキユース大学のレイモンド・F・パイパー哲学博士との写真などを展示した。また、帰国後に出版した『今日の印度』（改造社、1933年）や『戯曲 釈迦如来』（日本書房、1936年）の書籍と原稿、戦後に描いた画帖「印度旅行写生 詩聖タゴール翁を訪ふ」を展示し、昭和38年（1963）の二度目のインド旅行で翁が自ら撮影した8ミリフィルムのデジタル化映像を上映した。

第六章「望遠鏡で世界を観察し、顕微鏡で祖国を掘りさげて観察しよう―『高志人』創刊」では、昭和11年（1936）の『高志人』創刊前後から戦後の活動を中心に紹介した。『高志人』初期に掲載した翁の論考の自筆原稿、富山で『高志人』を主宰するかたわら東京で書籍出版を専門とする高志書房を設立し出版した仲小路彰『図説世界史話大成』全十巻（富山市立図書館翁久允文庫蔵）、戦時中の富山県内雑誌統合により改称して刊行された『高志』、昭和19年（1944）元日に発願し四年をかけて満願成就した「三尊三千体謹写」の経緯等を記した自筆資料と墨画観音像、昭和25年（1950）以降、逝去するまで『高志人』に毎号掲載した日記の素材となった一―三冊の自筆

日記、戦後に数多く制作した書画などを展示した。あわせて、『高志人』創刊に関わった柳田國男と片岡安太郎、『高志人』と富山県歌壇のよき理解者の一人であった川田順、『高志人』詩壇の選者であった高島高についてパネルで紹介し、書簡や『高志人』『高志』掲載原稿などを展示した。

第七章「脱日本人―『高志人』と三尊道舎」では、富山市安野屋（現・磯部町）に建築した高志人社事務所兼自宅を、昭和26年（1951）10月に「三尊道舎」と名づけ、『高志人』および三尊道運動の拠点として活動した晩年の事績を紹介した。三尊道舎で折々に開催された集会の写真や映像、昭和29年（1954）に翁の発願により三尊道舎の一角に建立された早百合観音祠堂にちなんだ翁自筆の墨画、三尊をはじめとした仏画、次代を担う優秀な若者の支援を目的とする高志奨学財団創設のために頒布した曼陀羅画帖と構想ノート、生前最後の発行となった『高志人』第38巻2月号や自ら編集を手がけ刊行中であった『翁久允全集 第6巻』関連の原稿などが没後に遺族によって一つの封筒にまとめられ大切に保管されていた翁久允の最後の原稿などを展示した。ここでは、『高志人』の読者であり寄稿もした富山県ゆかりの文学者として源氏鶏太、佐伯彰一、翁久允の三女で『高志人』で「与謝野晶子研究」を連載したことが研究の出発点となった日本近代文学研究者で歌人の逸見久美をパネルで紹介し、書簡、原稿、関連書籍などを展示した。

今回の企画展では、ご遺族から受贈した九三―四の翁久允旧蔵資料のうちごく一部ではあるが公開し、翁久允の事績と知友たちとの幅広い交遊を紹介した。主な展示作品・資料は、図録に図版を掲載した。新収蔵資料全体の目録は、企画展開催にあわせ、高志の国文学館ウェブサイト内の収蔵資料データベースで公開を開始した。

現在、翁久允旧蔵資料を所蔵する公的機関として、富山市立図書館、日本近代文学館、立命館大学図書館などがある。富山市立図書館翁久允文庫は、翁が生前に寄贈した旧蔵書を所蔵しており、今回の企画展に際し『図説世界史話大成』全十巻を出品いただいた。日本近代文学館は、泉鏡花、川端康成、鈴木三重吉など作家からの翁久允宛書簡と翁久允自筆の書画を所蔵する。立命館大学図書館には、翁久允研究会所蔵資料として在米時代を中心に自筆資料やスクラップ帳の複写物が所蔵されており、研究が進められてきた。今回

受贈した作品・資料には、複写物の原本と見られる資料が複数確認できる。これらはいずれも、相互調査により具体的な事実が明らかになる場合もあるうかと思われ、総体として、アメリカに渡った日本人の活動および大正末から昭和初期の文壇の状況の一端を知るうえで、また、現在に至る富山の文化を理解するうえで極めて重要な資料群であると言える。

『高志人』は、郷土研究誌として出発し、後に、翁久允その人を体現する媒体となった。富山に生まれ、アメリカで暮らし、インドを旅し、多くの知己を得て、再びふるさと富山に帰り、人と人が友としてつながることの重

□主な展示物

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
絵本	『キユーちゃんの日記』原画展示コーナー			
絵本原画	『キユーちゃんの日記』原画(25点)	長谷川義史	令和5年(2023)	作家蔵
スケッチ	『キユーちゃんの日記』ラフ画(19点)	長谷川義史	令和5年(2023)	作家蔵
書簡	翁久允宛葉書	長谷川義起	3月12日付	高志の国文学館
第一章「親不孝者になる」―六郎谷から富山、東京、そしてアメリカへ				
日記・ノート類	日誌簿(4冊)	翁久允	明治35年(1902)～明治36年(1903)	高志の国文学館
日記・ノート類	卯益月 美文集	素寒養生碧幽	明治36年(1903)	高志の国文学館
日記・ノート類	作文集	碧幽	明治38年(1905)	高志の国文学館
日記・ノート類	落葉清水 地	翁久允	明治39年(1906)	高志の国文学館
書簡	翁久允宛葉書(国際郵便)	翁源指	明治41年(1908)9月1日付	高志の国文学館
書簡	信二郎宛封書	翁源指	昭和3年(1928)7月22日付	高志の国文学館
原稿	「婦負」の語義と意義	辻本正一	昭和14年(1939)頃	高志の国文学館
日記・ノート類	処方高参帳(2冊)	〔翁源指〕	明治44年(1911)、大正9年(1920)	高志の国文学館
原稿	思ひ出断片	山田昌作(筆)	昭和13年(1938)頃	高志の国文学館
原稿	二十年を顧みる	山田昌作	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館

要性を説き、現代に続く富山の文化の礎を築いた。西洋と東洋の狭間で揺らぐ近代日本の姿を見つめ、ふるさと日本、富山、そして自分自身のあるべき姿を模索しつづけた翁久允の事績は、個人の記録であると同時に普遍性を持った時代の記録である。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、格別のご高配を賜りました須田満氏、逸見久美氏をはじめ、一方ならぬお力添えを賜りました関係各位に改めて心より深く感謝申し上げます。

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
原稿	『ブレマートン時代』以後の翁六溪	山田敏一	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
書簡	ス〇〇(翁久允)宛葉書(国際郵便)	中性慶	明治43年(1910)1月1日付	高志の国文学館
原稿	成田副知事歓迎	水木義一郎	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
書簡	翁久允宛葉書	竹島敬一	昭和25年(1950)1月2日付	高志の国文学館
書簡	齋藤八郎先生胸像再建除幕式のご案内	竹島敬一		高志の国文学館
第二章「ジャップの群の中」―シアトルからカリフォルニアへ				
日記・ノート類	在米日記帳	翁碧幽	明治40年(1907)8月20日	高志の国文学館
日記・ノート類	備忘録 偽らざるの記 プレマートンにて	六溪山人	明治42年(1909)5月24日～明治43年(1910)1月21日	高志の国文学館
日記・ノート類	感想録 プレマートン日誌	六溪山人	明治41年(1908)10月28日～明治42年(1909)1月	高志の国文学館
書簡	POKKA(翁久允)宛葉書	清沢洌	明治45年(1912)4月21日消印	高志の国文学館
切抜類	スクラップブック「月刊雑誌 太平楽水郷」			高志の国文学館
草稿	悪の日影(16枚)	翁久允		高志の国文学館
草稿	悪の日影(28枚)	〔翁久允〕		高志の国文学館
切抜類	悪の日影(日米、全99回連載)	翁六溪	大正4年(1915)6月3日～9月16日	高志の国文学館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
原稿	脚本 恋乎死乎	翁六溪	昭和4年(1929)	高志の国文学館。
原稿	翁久允宛葉書(国際郵便)	清沢湧、水木義一郎、亀谷	昭和4年(1929)9月26日付	高志の国文学館。
原稿	進歩する六溪山人	清沢湧	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館。
原稿	笑劇 八百弗問題(一幕物)	翁久允	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館。
印刷物	チャリン「Charles Chaplin A DOGS LIFE」(チャップリン「犬の生活」)	翁久允	大正7年(1918)公開	高志の国文学館。
歌稿	川下の歌	翁久允	大正5年(1916)12月17日	高志の国文学館。
切抜類	移民地の歌(川下雑詠)(日米)	翁六溪	大正5年(1916)12月17日	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	早川雪洲	昭和10年(1935)12月4日消印	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	早川雪洲	昭和37年(1962)4月29日付	高志の国文学館。
切抜類	ワシントン会議を報じる翁久允の署名記事(日米)	翁久允	大正10年(1921)	高志の国文学館。
書簡	翁六溪宛封書	小島久太	大正10年(1921)5月12日付	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	野口米次郎	7月8日付	高志の国文学館。
原稿	翁君に送る書	野口米次郎	昭和14年(1939)頃	高志の国文学館。
第二章 「不思議な半日本人、半外人」―朝日新聞社時代				
印刷物	東洋汽船サイベリア丸ランチョンメニュー	翁久允	大正13年(1924)4月4日	高志の国文学館。
原稿	宇宙人(コスモポリタン)は語る	翁久允		高志の国文学館。
原稿	道なき道	翁久允		高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	大泉黒石	6月8日付	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	大泉黒石	6月25日付	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛寄せ書き葉書	藤田健次、安成二郎、竹久夢二、森川憲之助、麻生豊、大泉黒石	昭和4年(1929)3月25日	高志の国文学館。
原稿	十三人倶楽部のころ	浅原六朗	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館。
原稿	「悪の日影」―不思議な価値	浅原六朗	昭和46年(1971)頃	高志の国文学館。
書簡	翁久允、家族宛葉書	浅原六朗、かつ	昭和48年(1973)1月1日	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	小寺菊子	昭和11年(1936)頃	高志の国文学館。
原稿	病床より	小寺菊子	昭和14年(1939)頃	高志の国文学館。
書簡	高志人社編輯局宛葉書	小寺菊子	昭和11年(1936)10月20日消印	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	郷倉千靱	昭和11年(1936)8月6日付	高志の国文学館。

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
原稿	小杉焼きに就いて	郷倉千靱	昭和11年(1936)頃	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛葉書	郷倉千靱	昭和16年(1941)7月30日付	高志の国文学館。
原稿	高志人と久允氏	郷倉千靱	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館。
絵画	源指像	麻生豊		個人蔵 (翁久允旧蔵)
絵画	宇奈月映	水木伸一		個人蔵 (翁久允旧蔵)
第四章 「惚れてゐたが故に」―竹久夢二とアメリカへ				
書簡	翁久允宛葉書	竹久夢二	昭和4年(1929)6月5日消印	高志の国文学館。
印刷物	チラシ「難によするてらん会」	竹久夢二	昭和5年(1930)	高志の国文学館。
書簡	久米正雄宛葉書	竹久夢二、翁久允	昭和6年(1931)4月15日付	高志の国文学館。
原稿	夢二と渡米の動機	翁久允		高志の国文学館。
日記・ノート類	スケッチブック	翁久允	昭和6年(1931)頃	高志の国文学館。
原稿	淋しい夢二の死	翁久允	昭和25年(1950)頃	高志の国文学館。
原稿	翁君に送る	翁久允		高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	安孫子久太郎	11月28日付	高志の国文学館。
書簡	翁久允宛封書	安孫子久太郎	11月28日付	高志の国文学館。
書簡	不Oscar「翁久允」宛封書	安孫子久太郎	5月5日付	高志の国文学館。
楽譜	中山晋平作曲全集(莖)、竹久夢二(莖)、山野菜器店(発行)	中山晋平(作曲)、竹久夢二(莖)、山野菜器店(発行)	昭和5年(1930)	高志の国文学館。
書簡	家族宛書簡(客船ディナーメニュー表への書き入れ)(8点)	翁久允	昭和6年(1931)5月7日、29日	高志の国文学館。
第五章 「そのままでもいいのだ」―インドでタゴールを訪ね、仏跡を巡る				
文書	インド渡航関係書類	翁久允	昭和7年(1932)頃	高志の国文学館。
日記・ノート類	渡印日誌吉	翁久允	昭和8年(1933)11月26日、昭和8年(1933)1月15日	高志の国文学館。
日記・ノート類	渡印誌式	翁久允	昭和8年(1933)1月16日、2月2日	高志の国文学館。
日記・ノート類	渡印誌参	翁久允	昭和8年(1933)2月3日、2月14日	高志の国文学館。
書跡	翁久允に贈った自筆の詩「[O Japan]」	ラビンドラナート・タゴール	昭和8年(1933)2月14日、3月2日	個人蔵 (翁久允旧蔵)

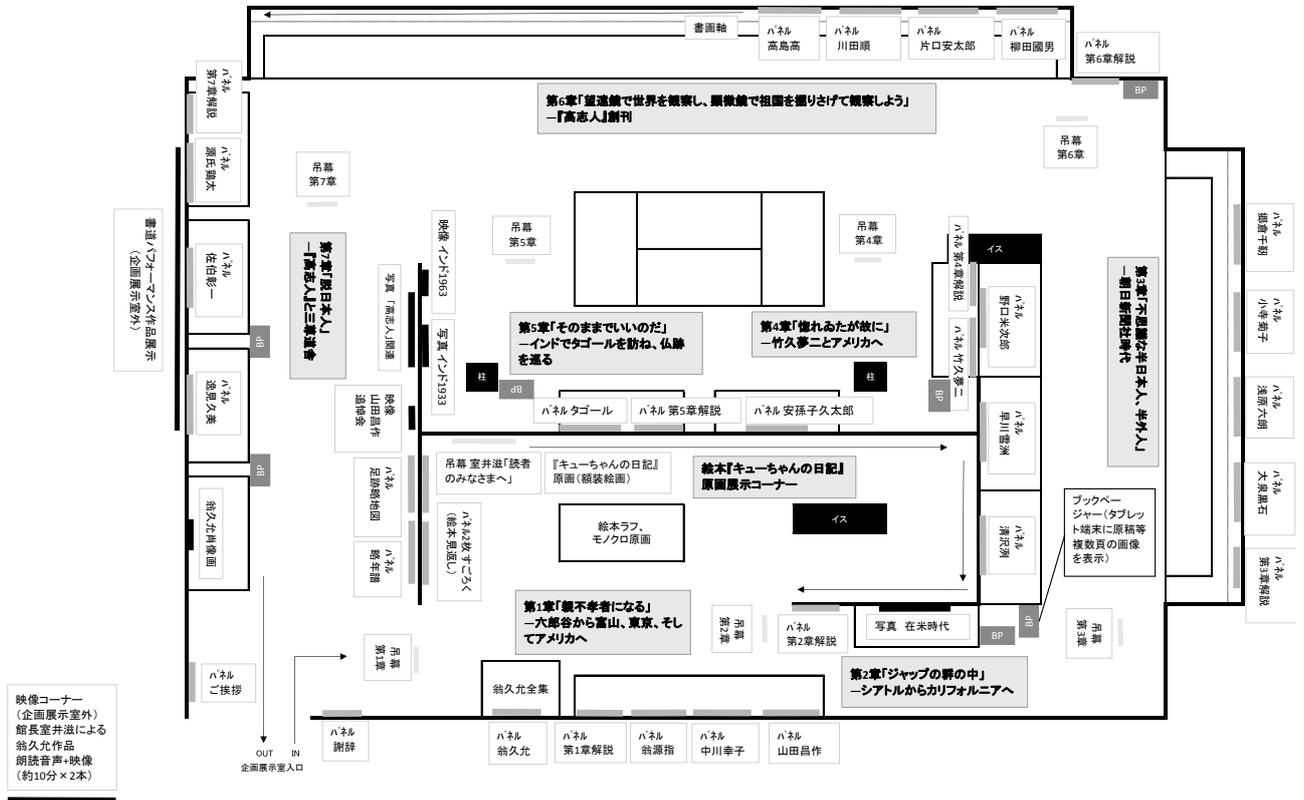
種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
原稿	印度旅行写生詩聖タゴール翁を訪ふ	翁久允	昭和22年(1947)頃	高志の国文学館
原稿	今日の印度	翁久允		高志の国文学館
原稿	戯曲 釈迦如来 (序幕、第三幕冒頭)	翁久允		高志の国文学館
原稿	戯曲 釈迦如来(第四幕、第六幕)	翁久允		高志の国文学館
第六章 「望遠鏡で世界を観察し、顕微鏡で祖国を掘りさげて観察しよう」―「高志人」創刊				
書簡	翁久允宛葉書	柳田國男	昭和9年(1934)5月31日付	高志の国文学館
原稿	越中と民俗	柳田國男	昭和12年(1937)頃	高志の国文学館
原稿	風盆八草	福田夕映	昭和18年(1943)頃	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	江馬修	昭和10年(1935)12月25日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	片口安太郎	昭和11年(1936)8月6日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	片口安太郎	昭和20年(1945)7月4日付	高志の国文学館
書籍	「高志人」製本冊子(31冊)		昭和13年(1938)頃 昭和49年(1974)個人蔵	富山市立図書館 翁久允文庫蔵
書籍	「図説世界史話大成」全10巻	仲小路彰(著)、高志書房(発行)	昭和12年(1937)頃 昭和16年(1941)頃	
原稿	役行者と非常時代	翁久允	昭和11年(1936)頃	高志の国文学館
原稿	東谷の伝説とその考察(一)	翁久允	昭和12年(1937)頃	高志の国文学館
原稿	立山伝説の考察	翁久允	昭和13年(1938)頃	高志の国文学館
原稿	富山と高岡をくし車出瀬と伏木	翁久允	昭和18年(1943)頃	高志の国文学館
原稿	越中紀行	川田順	昭和18年(1943)頃	高志の国文学館
原稿	北越紀行(四)	川田順	昭和18年(1943)頃	高志の国文学館
印刷物	絵葉書(大川寺公園に建立された川田順「鷲」歌碑)	藻谷印刷所(印刷)		高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	川田順	昭和20年(1945)7月22日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛葉書	川田順	昭和20年(1945)8月25日付	高志の国文学館
書簡	高志人社宛葉書	藻谷銀河	昭和14年(1939)12月12日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	片口江東		高志の国文学館
書簡	川田順宛封書	翁久允、小又幸井、増田永修	昭和29年(1954)5月27日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	川崎順二	昭和5年(1930)1月23日付	高志の国文学館
書簡	翁久允宛葉書	壺中庵(川崎順二)	昭和11年(1936)9月10日消印	高志の国文学館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書簡	翁久允宛葉書	吉井勇	昭和19年(1944)10月17日消印	高志の国文学館
原稿	高志に寄す	吉井勇	昭和20年(1945)頃	高志の国文学館
原稿	詩 螢鳥賊	高島高	昭和25年(1950)頃	高志の国文学館
原稿	隨筆 御風先生の思い出	高島高	昭和25年(1950)頃	高志の国文学館
原稿	志臣の子	相馬御風	昭和18年(1943)頃	高志の国文学館
原稿	観音諸相	翁久允		高志の国文学館
原稿	橙橘芳馨	安成二郎	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
原稿	翁君二十年の奮闘	横山四郎右衛門	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
原稿	勿体ない(得難い)人物	北川楊村	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
原稿	翁像	佐伯宗義	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
原稿	長いようで短い二十年	片口江東	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
書簡	翁久允宛葉書	片口安太郎	昭和26年(1951)10月20日付	高志の国文学館
日記・ノート類	「雄山神社私誌」1、7、「太権庵日誌」8、11、13(11、13冊)	翁久允	昭和24年(1949)3月1日、昭和48年(1973)2月13日	高志の国文学館
書画	〈観音像〉	翁久允	昭和20年(1945)11月25日	高志の国文学館
書画	地天	川田順(賛) 翁久允(画)		個人蔵
書画	印度古城趾	吉井勇(賛) 翁久允(画)		個人蔵
書画	〈翁キヨ三周忌〉	翁久允	昭和28年(1953)	個人蔵
書画	〈釈尊像〉	早川雪洲(賛) 翁久允(画)		高志の国文学館
絵画	〈観音図〉	翁久允		室井滋蔵
書画	宇尾悦子宛暑中見舞い	翁久允	昭和42年(1967)	高志の国文学館
書画	ある日の布袋和尚	翁久允		高志の国文学館
書画	良寛	翁久允		高志の国文学館
第七章 「脱日本人」―「高志人」と三尊道舎				
書画	真・正・愛	翁久允		高志の国文学館
書画	〈立山権現〉	翁久允		高志の国文学館
書画	〈神通川原〉	翁久允		高志の国文学館
原稿	「高志人」と私	源氏鶏太	昭和30年(1955)頃	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	源氏鶏太	昭和46年(1971)頃	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書	佐伯彰一	昭和46年(1971)9月4日付	高志の国文学館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
自筆資料	翁久允宛葉書	佐伯彰一	昭和25年(1950) 7月10日消印	高志の国文学館・
印刷物	絵葉書「謹賀新年 1964年 元旦」すがき天山スライドだより「インド、ネパール国境 祝降誕の地にて」増田永修師 須垣天山 高峰博士 翁久允 師一	須垣天山	昭和39年(1964) 1月1日	個人蔵 (翁久允旧蔵)
書画	途上の印象	翁久允		高志の国文学館・
写真	稚翁の曼陀羅行			高志の国文学館・
画帖	太稚庵日記帖の遊画より	翁久允	昭和42年(1967)	高志の国文学館・
画帖	良寛曼陀羅 構想	翁久允	昭和41年(1966)	高志の国文学館・
草稿	與謝野晶子研究(十一)「小扇」	翁久美	昭和26年(1951)頃	高志の国文学館・
画帖	日蓮曼陀羅	翁久允		高志の国文学館・
画帖	越中萬葉遺跡	翁久允		高志の国文学館・
原稿	(翁久允の最後の原稿)	翁久允		高志の国文学館・
絵画	父	逸見久美	昭和56年(1981)	高志の国文学館
映像	インド(印度仏跡再探雑景)	翁久允(撮影)	昭和38年(1963) 11、12月	高志の国文学館・
映像	山田肩作追悼会	撮影者不明	昭和38年(1963) 4月8日	高志の国文学館・

・令和5年度新収蔵の翁久允旧蔵資料は、所蔵に「・」を付した。

□企画展示室平面図



「没後50年 コスモポリタン 翁久允 OKINA Kyuin 脱日本人」展」会場構成図 令和5年12月16日～令和6年3月4日 高志の国文学館

(4) 企画展

「堀辰雄生誕120年展」

「風立ちぬ」堀辰雄と軽井沢の文学者たち」

綿引 香織

堀辰雄は、明治37年（1904）12月28日、東京市麹町区平河町にて、東京地方裁判所勤務の堀濱之介、西村志氣の間に生まれた。後に彫金師の上條松吉に嫁した母とともに東京向島で育ち、東京府立第三中学校（現両国高校）を経て、大正10年（1921）に第一高等学校理科乙類に入学した堀は、在学中、生涯の親友となる神西清を知り、文学に親しんだ。室生犀星と芥川龍之介の知遇を得、軽井沢で片山廣子を知るが、関東大震災で母を失い、その後の療養生活へとつながる肺結核を発病。大正14年（1925）、東京帝国大学国文科に入学し、同人誌『山繭』などに参加、中野重治らと『驢馬』を創刊して詩・小説・エッセイを発表。20世紀フランス文学に親しみ、翻刻・紹介に努めた。

芥川の死後、「不器用な天使」（1929年）、「聖家族」（1930年）で文壇に注目された堀は、以降、ブルーストヤリルケ、モーリヤック、日本の古典文学などに学びつつ、「美しい村」（1933〜34年）、「風立ちぬ」（1936〜38年）、「かげろふの日記」（1937年）、「姨捨」（1940年）、「菜穂子」（1941年）などの作品を発表。昭和8年（1933）には季刊誌『四季』を創刊。翌年には三好達治・丸山薫らと月刊誌として復刊させ、詩壇に大きな影響を与えるとともに、立原道造、中村真一郎、福永武彦などの若手詩人・作家育成の場ともなった。戦後は病床での生活が続ぎ、昭和28年（1953）5月28日、48歳で生涯を閉じた。

堀の生誕120年にあたって開催した本展は、堀辰雄文学記念館から約150点、軽井沢高原文庫から約50点の貴重な資料をお借りし、そこに当館の収蔵品などを加えた約250点で構成した。

企画展示室に至るまでの導入エリアには、軽井沢に点在する堀辰雄ゆかりの地について、作品の一節と木下裕章氏の写真により紹介した「軽井沢へのいざない」コーナー、作品と作家に関するエピソードを紹介した「はじめての堀辰雄・7つの質問箱」、作品朗読（11作品の抜粋）の鑑賞コーナー、「私の好きな堀辰雄作品」と「私の好きな小説／恋愛小説」を投稿していたく参加型の展示コーナー、関連図書の閲覧コーナーを設置した。

展示室のなかには四章に分かれており、堀の生涯をたどりながら、その代表作がどのような経緯で生まれてきたのかを紹介する構成とした。

第1章「作家 堀辰雄の出生―『聖家族』発表まで」では、一高在籍中に室生犀星・芥川龍之介という二人の師に出会う幸運に恵まれた堀が、文学修行や人生経験をを経て、出世作「聖家族」（1930年）を完成させるまでの軌跡を紹介。犀星や芥川からの堀宛書簡、卒論「芥川龍之介論」、参加していた同人誌とそこに発表した翻訳やエッセイ、原稿、日記などを展示した。また、その後の作品に大きな影響を与えた1923〜25年の軽井沢体験や、「聖家族」のモデルとなった片山廣子一家との交流を示す資料も紹介。軽井沢の堀が父松吉宛に出した葉書、当時のことを記したメモ、堀と片山廣子の往復書簡などを展示した。「聖家族」に描かれたモチーフは、その後も形を変えながら繰り返し描かれていく。

第2章「作家である『私』の物語―『美しい村』と『風立ちぬ』」では、堀の実生活を反映した二つの代表作について、その作品世界や成立背景を紹介。「美しい村」については、執筆にあたって影響を受けたブルーストヤリルケに関する研究ノート、書込みのある蔵書、作品構想を語るノートなどを、「風立ちぬ」については、堀による婚約者矢野綾子宛書簡、写真、執筆にあたって影響を受けたリルケに関する研究ノート、終章執筆時に出された室生朝子宛葉書、映画パンフレットなどを展示した。

またここでは、この時期に堀が中心となって創刊した詩誌『四季』（第1次・第2次）を紹介した。抒情詩復興の一大拠点となった第2次『四季』（昭和9〜19年、全81冊）は、戦時下の日本に西欧文学を紹介し続けた功績も大きい。あわせて、同誌で早くから活躍した夭折の詩人・立原道造との交流について、書簡や作品などにより紹介した。

私小説とは異なる本格的な小説を書くこととする堀の試みは、「聖家族」から「物語の女」（1934年）を経て、「菜穂子」（1941年）へと結実していく。第3章「ヘロマン」追求の軌跡―『菜穂子』の系譜―では、作品構想や人物像に影響を与えたモーリヤックやリルケに関する蔵書、研究ノートなどを展示したほか、堀の言葉や創作ノートなどにより、完成までに7年の歳月を要した「菜穂子」の創作過程をひもといた。本作は堀が「生れてはじめて本当に小説らしい小説を書いたような」気がすると言った作品である。

このほか、堀の愛用品として、ドイツ製の色鉛筆、芥川龍之介から堀、中村真一郎へと受け継がれたパイプ、蓄音機、SPレコード、籐の椅子とテーブルなどを展示した。室内には堀の旧蔵レコードの音源を流した。

第4章「日本の古典と西洋文学との融合―『かげろふの日記』から『大和路・信濃路』まで―」では、「かげろふの日記」とその続編「ほととぎす」、「姨捨」、「曠野」など、堀が日本の古典文学に材を求めた作品をとりあげ、書込みのある蔵書や構想ノート、原稿などにより紹介した。堀文学においては、西欧文学から得たテーマを追求する姿勢は一貫しており、素材となった日本の古典文学との独特な融合を果たしているところに特徴がある。昭和12年（1937）頃からは、国文学者で詩人・歌人の折口信夫に傾倒して古代への関心を深めており、そのことをうかがわせる蔵書、研究ノート、書簡のほか、構想段階に終わった古代小説に関する創作ノートや書簡なども展示した。また、エッセイ「大和路・信濃路」に関する旅の取材ノートや書簡なども展示した。

戦後の堀は、昭和21年（1946）に同人誌『高原』の創刊、『四季』の再刊（第3次）『堀辰雄作品集』の刊行など、活発な文学活動を再開するが、やがて病状が悪化。同年3月に発表した「雪の上の足跡」が実質的に最後の作品となった。『高原』や『四季』は、中村真一郎、福永武彦、加藤周一、野村英夫、遠藤周作など、堀を慕う若手作家たちの作品発表の場ともなっている。堀の戦後の活動と幅広い交遊関係について、書簡、写真、掲載誌、弔辞、雑誌の追悼号、関係者の著書などにより紹介した。また堀作品は、戦後になって旧作が続々と刊行され、多くの読者を獲得していった。そのことを示す神西清による堀宛書簡や、没後に刊行された全集などを展示した。

本展の見どころは、堀辰雄文学記念館と軽井沢高原文庫の全面的なご協力

のもと、原稿やノート、メモ、書簡、書込みのある蔵書など、堀の貴重な自筆資料を数多く展示できた点にある。日本語、フランス語、時にドイツ語などで書かれたノートは、西欧文学を熱心に学んだ堀の姿を伝えてくれる。また、さまざまな文学者との間で交わされた書簡、愛用品、写真などは、堀の人柄や交遊関係、作品の背景などを理解する一助となった。このほか、今回特別公開した当館所蔵の片山廣子による芥川龍之介宛書簡は、1924年、25年の軽井沢と東京での両者の交流の様子を伝えるものであり、堀の人生と作品に大きな影響を与えた軽井沢体験の一端を伝える貴重な資料となっている。

この書簡の旧蔵者である辺見じゅんの父は、俳人で出版者の角川源義である。折口信夫の弟子にあたる角川は、戦後まもなく創業した角川書店から堀の著作を発行することに情熱を注いだ。後年出版社「幻戯書房」を立ち上げた娘の辺見は、戦前に堀も関わっていた江川書房、野田書房の造本を愛し、堀作品の初版本や『四季』などを収集していた。今回の展示ではこれらの旧蔵資料がいきている。

堀辰雄は、親しい人たちの死や自らの病、戦争という時代状況など、さまざまな困難と静かに戦い、時代状況に左右されずに作品のテーマを追求し続ける強さをもった作家であった。また堀作品には、作品の舞台が日本なのか外国なのかかわからないような不思議な空気感があり、100年近くたった今でも古くさく感じない魅力がある。展示を通じて、代表作だけに留まらない堀作品の普遍的な魅力を再発見していただけたとしたら幸いである。

最後に、本展の開催にあたって多大なご協力をいただいたご遺族の皆様をはじめ、貴重な資料をご出品いただいた堀辰雄文学記念館、軽井沢高原文庫、このほかお世話になったご関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

□主な展示物

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
写真 (パネル)	母 志氣	—	—	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	養父上條松吉と辰雄	—	大正4年(1915)	堀辰雄文学記念館
書籍 (パネル)	幼年時代(青磁社)	堀辰雄	昭和17年(1942)	高志の国文学館
写真 (パネル)	旧制第一高等学校入学の頃	—	大正10年(1921)	堀辰雄文学記念館
雑誌	「仏蘭西人形(詩)」「橄欖の森」(3号)	堀辰雄	大正12年(1923) 7月	堀辰雄文学記念館
書籍	麦藁帽子(四季社)	堀辰雄	昭和8年(1933)	軽井沢高原文庫
書籍	燃ゆる頬(新潮社)	堀辰雄	昭和14年(1939)	軽井沢高原文庫
写真 (パネル)	室生犀星と芥川龍之介 つるや旅館の庭にて	—	大正13年(1924) 8月	軽井沢高原文庫
書籍	堀辰雄宛封書	室生犀星	大正12年(1923) 10月19日消印	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	芥川龍之介	大正12年(1923) 11月18日	堀辰雄文学記念館
書籍	上條松吉宛葉書	堀辰雄	大正14年(1925) 8月28日、9月3日	堀辰雄文学記念館
メモ	「父への手紙」のメモ	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	片山廣子	大正14年(1925) 8月30日消印	堀辰雄文学記念館
書籍	片山廣子宛封書	堀辰雄	大正14年(1925) 9月1日	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	芥川龍之介	大正15年(1926) 7月20日夜作成	堀辰雄文学記念館
雑誌	「僕の友だち三人」(文章倶楽部) 昭和2年5月号	芥川龍之介	昭和2年(1927) 5月	高志の国文学館
新聞 (パネル)	卒論「芥川龍之介論」(東京朝日新聞)	東京朝日新聞社	昭和2年(1927) 7月25日	朝日新聞社
原稿	卒論「芥川龍之介論」	堀辰雄	昭和3年(1928) 12月	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	室生犀星	昭和3年(1928) 1月17日作成	堀辰雄文学記念館
雑誌 (復刻版)	「ジャン・コクトオ詩抄」ほか(「驢馬」第3号)	堀辰雄	大正15年(1926) 6月	軽井沢高原文庫
雑誌 (復刻版)	「貝殻と薔薇」(「ノット」第2巻第4号)	堀辰雄	大正15年(1926) 12月	高志の国文学館
書籍	堀辰雄宛封書	中野重治	昭和4年(1929) 11月30日作成	堀辰雄文学記念館
書籍	コクトオ抄(厚生閣書店)	堀辰雄	昭和4年(1929)	軽井沢高原文庫

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
雑誌	「フランス文学を如何に観るか」(作品 1巻7号)	堀辰雄	昭和5年(1930) 11月	堀辰雄文学記念館
雑誌	「文学的散歩」ほか(「リベルテ」創刊号)	堀辰雄	昭和7年(1932) 11月	堀辰雄文学記念館
雑誌	詩「天使達が…」ほか(「詩と詩論」第四冊)	堀辰雄	昭和4年(1929) 6月	高志の国文学館
書籍	堀辰雄詩集(山本書店)	堀辰雄	昭和15年(1940)	軽井沢高原文庫
原稿	不器用な天使	堀辰雄	昭和4年(1929) 2月発表	軽井沢高原文庫
書籍	不器用な天使(改造社)	堀辰雄	昭和5年(1930)	高志の国文学館
雑誌	「眠つてゐる男」(「文学」創刊号)	堀辰雄	昭和4年(1929) 10月	堀辰雄文学記念館
書籍	モダン TOKIO 円舞曲	堀辰雄ほか	昭和5年(1930)	堀辰雄文学記念館
日記	日記	堀辰雄	昭和4年(1929) 8月30日	堀辰雄文学記念館
雑誌 (復刻版)	「ルウベンスの偽画」初稿(山藤第2巻第6号)	堀辰雄	昭和2年(1927) 2月	高志の国文学館
雑誌	「ルウベンスの偽画」定稿(作品創刊号)	堀辰雄	昭和5年(1930) 5月	堀辰雄文学記念館
書籍	ルウベンスの偽画(江川書房)	堀辰雄	昭和8年(1933)	高志の国文学館
雑誌	「聖家族」(改造)第12巻第11号	堀辰雄	昭和5年(1930) 11月	堀辰雄文学記念館
書籍	聖家族(江川書房)	堀辰雄	昭和7年(1932)	高志の国文学館
書籍	聖家族(野田書房)	堀辰雄	昭和11年(1936)	軽井沢高原文庫
書籍	芥川龍之介宛書簡	片山廣子	大正14年(1925) 9月23日作成	高志の国文学館
原稿	歌稿 追分のみち	片山廣子	—	高志の国文学館
雑誌	「越びと」(明星)第6巻第3号	芥川龍之介	大正14年(1925) 3月	高志の国文学館
書籍	堀辰雄宛封書	片山廣子	昭和3年(1928) 1月19日	堀辰雄文学記念館
雑誌 (復刻版)	「トイトイフウは戦はない」(小説)「マリノ対話篇」(「山藤」第3巻第5号)	宗瑛/吉村鐵太郎	昭和3年(1928) 5月	高志の国文学館
雑誌	「宗瑛の作品について」(「文学」4号)	堀辰雄	昭和5年(1930) 1月	堀辰雄文学記念館
スケッチ	堀辰雄の顔	片山總子画	—	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛葉書	片山總子	昭和6年(1931) 8月15日	堀辰雄文学記念館
書籍	失ひし時を求めて(第一巻スワン家の方(武蔵野書院))	淀野隆三・佐藤正彰訳	昭和6年(1931)	堀辰雄文学記念館
ノート	ブルウストV	堀辰雄	昭和6年(1931) 32)	堀辰雄文学記念館
ノート	ブルウストI	堀辰雄	昭和7年(1932)以降	堀辰雄文学記念館
ノート	ブルウストIX	堀辰雄	昭和7年(1932)頃	堀辰雄文学記念館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書籍	ファウスト 第二部	ゲーテ著、 森林太郎訳	大正2年(1913)	堀辰雄文学記念館
書籍	若いエテルの悩み(岩波書店)	ゲョエテ著、 茅野蕭々訳	昭和3年(1928)	堀辰雄文学記念館
ノート	「美しい村」ノート	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
雑誌	「美しい村」(改造) 第15巻 第10号	堀辰雄	昭和8年(1933) 10月	堀辰雄文学記念館
書籍	美しい村(野田書房)	堀辰雄	昭和9年(1934)	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	横光利一	昭和8年(1933) 11月13日消印	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄宛封書	萩原明太郎	昭和9年(1934) 6月25日	堀辰雄文学記念館
書籍	矢野綾子宛封書	堀辰雄	昭和9年(1934) 9月26日	堀辰雄文学記念館
絵画	油彩画「子供のいる風景」	矢野綾子	—	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	婚約者 矢野綾子	—	—	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	富士見高原療養所	富士見高原医療 福祉センター 富士見高原病院	—	堀辰雄文学記念館
書籍	室生犀星宛封書	堀辰雄	昭和11年(1936) 11月22日作成	堀辰雄文学記念館
雑誌	「風立ちぬ」(改造) 第18巻第12号	堀辰雄ほか	昭和11年(1936) 12月	堀辰雄文学記念館
書籍	風立ちぬ(新潮社)	堀辰雄	昭和12年(1937)	堀辰雄文学記念館
ノート	リルケXX	堀辰雄	昭和12年(1937)頃	堀辰雄文学記念館
ノート	リルケXI	堀辰雄	昭和12年(1937)頃	堀辰雄文学記念館
書籍	室生朝子宛葉書	堀辰雄	昭和12年(1937) 11月30日消印	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	川端康成と軽井沢にて	—	昭和18年(1943)頃	堀辰雄文学記念館
書籍	風立ちぬ(野田書房)	堀辰雄	昭和13年(1938)	高志の国文学館
パンフレット	「風立ちぬ」映画パンフレット (東宝株式会社事業部)	宮内婦貴子脚 本、 若杉光夫監督	昭和51年(1976)	個人
写真 (パネル)	昭和12年(1937) 秋、火事 になる前の油屋にて	—	昭和12年(1937)	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	結婚記念写真	—	昭和13年(1938) 4月17日	堀辰雄文学記念館
書籍	室生犀星宛封書	堀辰雄	昭和13年(1938) 5月3日作成	堀辰雄文学記念館
雑誌	四季 I、II(復刻版)	堀辰雄編	昭和8年(1933) 5月、7月	堀辰雄文学記念館

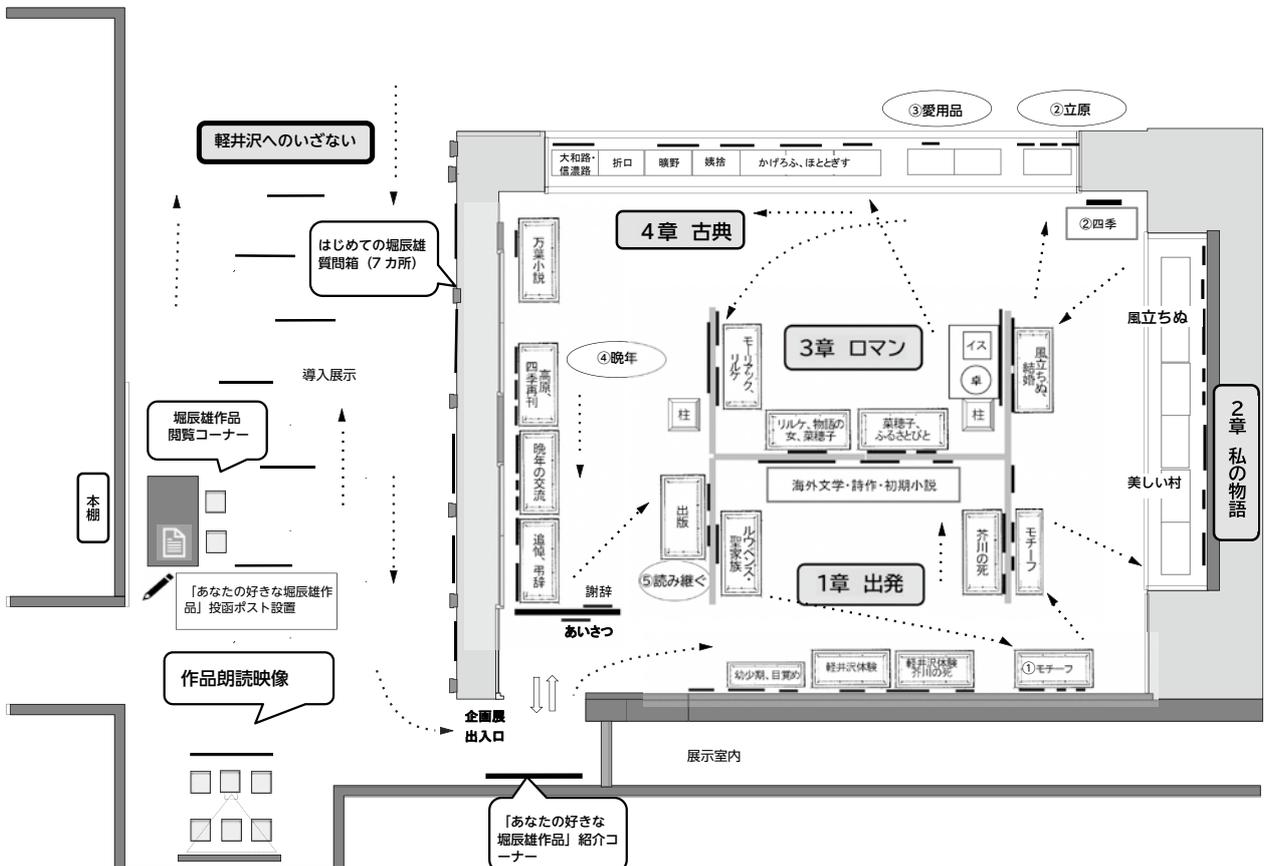
種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
雑誌	四季 創刊号	三好達治・丸 山薫・堀辰雄 編	昭和9年(1934) 10月	高志の国文学館
雑誌	四季 第81号(終刊号)	堀辰雄ほか	昭和19年(1944) 6月	高志の国文学館
絵画	パステル画	立原道造	—	堀辰雄文学記念館
書籍	葦草に寄す (特装本/風信子叢書刊行会刊)	立原道造	昭和12年(1937)	提供 堀辰雄文学記念館
雑誌	評論「風立ちぬ」(四季 第37号)	立原道造	昭和13年(1938) 5月	高志の国文学館
書籍	堀辰雄宛葉書	立原道造	昭和13年(1938) 11月11日	堀辰雄文学記念館
書籍	立原道造全集 全3巻 (特装本/山本書店)	堀辰雄ほか編	昭和16・18年(1941 ・43)	提供 堀辰雄文学記念館
書籍	立原道造一周忌の寄書き	堀辰雄、室生 犀星、萩原明 太郎ほか	昭和15年(1940)頃	提供 堀辰雄文学記念館
雑誌	「物語の女」(文藝春秋) 第12巻 第10号	堀辰雄	昭和9年(1934) 10月	堀辰雄文学記念館
書籍	短篇集 物語の女(山本書店)	堀辰雄	昭和9年(1934)	高志の国文学館
書籍	愛の砂漠(白水社)	モーリヤック 著、 杉捷夫訳	昭和14年(1939)	堀辰雄文学記念館
書籍	リルケ詩集(第一書房)	リルケ著、 茅野蕭々訳	昭和14年(1939)	堀辰雄文学記念館
書籍	リルケ雑記(創元社)	リルケ著、 大山定一ほか 訳	昭和22年(1947)	堀辰雄文学記念館
雑誌	「ブリッケの手記(リルケ)」ほか (四季) 第2号	堀辰雄	昭和9年(1934) 11月	高志の国文学館
雑誌	四季 第8号(リルケ研究号)	堀辰雄ほか	昭和10年(1935) 5月	高志の国文学館
ノート	リルケIX	堀辰雄	昭和5・18年頃(1930 ・43)	堀辰雄文学記念館
ノート	リルケXVI(ドゥイノノ悲歌) DI ERS T E L E G I E	堀辰雄	昭和13年(1938)	堀辰雄文学記念館
ノート	「菜穂子」創作ノート(複製)	堀辰雄	原本・昭和15年(1940) 頃	堀辰雄文学記念館
雑誌	「菜穂子」(中央公論) 第56巻第 3号	堀辰雄	昭和16年(1941) 3月	堀辰雄文学記念館
ノート	「菜穂子」覚書	堀辰雄	昭和16年(1941) 8月15日記	堀辰雄文学記念館
書籍	菜穂子(創元社)	堀辰雄	昭和16年(1941)	高志の国文学館
愛用品	中央公論社文藝賞 賞状	—	昭和17年(1942) 3月	堀辰雄文学記念館
愛用品	ペン皿、万年筆、ドイツ製の色 鉛筆、双眼鏡、パイプ	—	—	堀辰雄文学記念館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
絵画	堀辰雄像	深澤紅子	昭和60年(1985)	軽井沢高原文庫
愛用品	蓄音機	—	—	軽井沢高原文庫
愛用品	SPレコード ショパン 〔24の前奏曲 作品28(全24曲) レクイエムコード〕	—	—	堀辰雄文学記念館
愛用品	藤の椅子・テーブル	—	—	軽井沢高原文庫
書籍	蜻蛉日記講義(東京武蔵野書院)	喜多義男	昭和12年(1937)	堀辰雄文学記念館
ノート	蜻蛉日記	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
原稿	かげろふの日記	堀辰雄	昭和12年(1937) 12月発表	堀辰雄文学記念館
書籍	雉子日記(河出書房)	堀辰雄	昭和15年(1940)	軽井沢高原文庫
雑誌	〔ほととぎす〕〔文藝春秋〕第17 巻(第3号)	堀辰雄	昭和14年(1939) 2月	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛封緘葉書	折口信夫	昭和14年(1939) 8月22日	堀辰雄文学記念館
書籍	かげろふの日記(創元社)	堀辰雄	昭和15年(1940)	軽井沢高原文庫
書籍	校註更級日記(明治書院)	関根正直	昭和14年(1939)	堀辰雄文学記念館
ノート	蜻蛉日記・史料日記	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
原稿	姨捨記	堀辰雄	昭和16年(1941) 8月発表	堀辰雄文学記念館
書籍	晩夏(甲鳥書林)	堀辰雄	昭和16年(1941)	軽井沢高原文庫
書籍	伊勢物語(改造社)	久松潜一	昭和12年(1937)	堀辰雄文学記念館
書籍	伊勢物語新釋(国文名著刊行会)	藤井高尚	昭和9年(1934)	堀辰雄文学記念館
書籍	今昔物語選 下巻(博文館)	池邊義象	大正13年(1924)	堀辰雄文学記念館
ノート	伊勢物語(一)	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
書簡	堀多恵宛葉書	堀辰雄	昭和16年(1941) 10月25日	堀辰雄文学記念館
書籍	曠野(養徳社)	堀辰雄	昭和19年(1944)	軽井沢高原文庫
書籍	古代研究 第一部、第二部 (大岡山書店)	折口信夫	昭和4年(1929)	堀辰雄文学記念館
ノート	古代研究(一)	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
ノート	国文学の発生	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
書籍	死者の書(青磁社)	釋道空	昭和18年(1943)	高志の国文学館
書籍	堀多恵宛葉書	堀辰雄	昭和16年(1941) 10月12日朝、夕	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛封書	堀多恵	昭和16年(1941) 10月14日作成	堀辰雄文学記念館
ノート	大和路(一)	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
日記	日記	堀辰雄	昭和18年(1943) 4月12日、16日	堀辰雄文学記念館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
書簡	野村英夫宛葉書	堀辰雄	昭和16年(1941) 12月6日	堀辰雄文学記念館
雑誌	〔大和路・信濃路(一)〕 〔婦人公論〕第28巻(第1号)	堀辰雄	昭和18年(1943) 1月	堀辰雄文学記念館
書籍	花あしび(青磁社)	堀辰雄	昭和21年(1946)	軽井沢高原文庫
書籍	大和路・信濃路(人文書院)	堀辰雄	昭和29年(1954)	高志の国文学館
書籍	萬葉戀愛歌讀本(学芸社)	折口信夫・ 北原白秋編	昭和12年(1937)	堀辰雄文学記念館
ノート	水のうへ	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
ノート	出帆	堀辰雄	—	堀辰雄文学記念館
ノート	リルケ1	堀辰雄	昭和10年、12年(1935 、37)	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	1412番別荘のベランダにて	—	昭和17年(1942) 頃	堀辰雄文学記念館
写真 (パネル)	信濃追分分去れにて	—	昭和21年(1946)	堀辰雄文学記念館
雑誌	〔雪の上の足跡〕〔新潮〕第43巻 第3号	堀辰雄	昭和21年(1946) 3月	高志の国文学館
雑誌	〔旗手クリストフ・リルケの愛と 死の歌〕〔高原〕第1輯	堀辰雄	昭和21年(1946) 8月	高志の国文学館
雑誌 (復刻版)	〔堀辰雄論〕〔高原〕第6輯	遠藤周作	昭和23年(1948) 3月	高志の国文学館
写真 (パネル)	ペア・ハウスにて	—	昭和18年(1943) 頃	堀辰雄文学記念館
書籍	野村英夫詩集(角川書店)	野村英夫著、 堀辰雄編	昭和28年(1953)	軽井沢高原文庫
書簡	野村英夫宛葉書	堀辰雄	昭和21年(1946)	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛封書	神西清	昭和21年(1946) 6月5日	堀辰雄文学記念館
雑誌	四季 再刊第1号	堀辰雄編	昭和21年(1946) 8月	高志の国文学館
雑誌	四季 再刊第5号(終刊)	神西清編	昭和22年(1947) 12月	高志の国文学館
書簡	堀辰雄宛封書	小林秀雄	昭和20年(1945) 10月19日	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛葉書	中野重治	昭和20年(1945) 12月21日作成	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛葉書	加藤周一	昭和19年(1944) 11月30日	堀辰雄文学記念館
書籍	1946 文学的考察 (真善美社)	加藤周一・中 村眞一郎・福 永武彦共著	昭和22年(1947)	軽井沢高原文庫
書簡	堀辰雄宛封書	中村眞一郎	昭和22年(1947) 6月30日	堀辰雄文学記念館
書簡	堀辰雄宛封書	福永武彦	昭和27年(1952) 8月4日	堀辰雄文学記念館

種別	資料(作品)名	作者	初出・年代	所蔵
写真 (パネル)	病床で多恵夫人と 芝増上寺の告別式	—	昭和27年(1952) 昭和28年(1953) 6月3日	堀辰雄文学記念館
弔辞 (パネル)	堀辰雄宛弔辞	室生犀星	昭和28年(1953) 6月3日付	堀辰雄文学記念館
原稿	堀辰雄のこと―愛すべき人柄品 格ある作品―	佐藤春夫	昭和28年(1953) 8月発表	堀辰雄文学記念館
雑誌	文藝 第10巻8月号 (堀辰雄追悼号)	河上徹太郎 ほか	昭和28年(1953) 8月	軽井沢高原文庫
書籍	我が愛する詩人の伝記 (中央公論社)	室生犀星	昭和33年(1958)	軽井沢高原文庫
書籍	来し方の記・辰雄の思い出 (花曜社)	堀多恵子	昭和60年(1985)	個人
書簡	堀辰雄宛封書	神西清	昭和21年(1946) 3月18日作成	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄集(新潮社)	神西清編	昭和25年(1950)	軽井沢高原文庫
書籍	堀辰雄作品集(角川書店)	堀辰雄編	昭和26年(1951) 53	高志の国文学館
愛用品	毎日出版文化賞 賞状	—	昭和25年(1950) 10月9日	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄全集 全7巻(新潮社)	—	昭和29(1954) 57	堀辰雄文学記念館
書籍	堀辰雄全集 全11冊(筑摩書房)	中村眞一郎・ 福永武彦編	昭和52(1977) 80	高志の国文学館

□企画展示室平面図



令和5年度高志の国文学館紀要第9号

令和6年9月30日発行

編集 高志の国文学館

富山県富山市舟橋南町2-22

TEL 076-431-5492

印刷 北日本印刷株式会社

発行 高志の国文学館

※許可なく転載、複製することを禁じます。